



婚礼に来たれ！



*Come to
the Marriage*

チャールズ・L・スミス 著

婚礼（結婚式）に来たれ

神の言葉は結婚式へのきわめて重要な招待を提供している。

マタイ 22:2-5「天国は、ひとりの王がその王子のために、婚宴を催すようなものである。王はその僕たちをつかわして、この婚宴に招かれていた人たちを呼ばせたが、その人たちはこようとはしなかった。そこでまた、ほかの僕たちをつかわして言った、『招かれた人たちに言いなさい。食事の用意ができました。牛も肥えた獣もほふられて、すべての用意ができました。さあ、婚宴においでください』。しかし、彼らは知らぬ顔をして、ひとりでは自分の畑に、ひとりでは自分の商売に出て行き」。

人々の応答に注目していただきたい。せつかくの結婚式への招待を拒み、軽視し、無視している。彼らは自分たちのビジネスで忙しすぎるのである。

マタイ 25:10-12「彼らがいちに出ていっているうちに、花婿が着いた。そこで、用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやに入り、そして戸がしめられた。そのあとで、ほかのおとめたちもきて、『ご主人様、ご主人様、どうぞ、あけてください』と言った。しかし彼は答えて、『はっきり言うが、わたしはあなたがたを知らない』と言った」。

マタイ 25章も天国を婚礼（結婚式）に例えている。結婚式に出るのは賢い乙女たちで、遅れてやってくるのは愚かな乙女たちである。だから、結婚式に出席するのはわれわれの救いのために非常に重要である。

招待されている結婚式にどのように行ったらいいのだろうか？ 結婚式に出席するためには結婚式とは何であり、どこでおこなわれるのか、いつおこなわれるかを我々は理解しなければならない。

「ダニエル書 8：14 に示されているところの、キリストがわれわれの大祭司として、聖所を清めるために至聖所に来られるということ、ダニエル書 7：13 に提示されている、人の子が日の老いたる者のもとに来るとということ、そしてマラキが預言した主がその宮に来られるということ、これらはみな、同じできごとの描写である。そして、これはまた、キリストがマタイによる福音書 25 章の十人のおとめのたとえの中で語られた、婚宴（結婚式）の席への花婿の到着ということによっても表わされている」（大争闘下 142）。

「マタイによる福音書 22 章のたとえにおいて、同じ婚宴の象徴が用いられ、婚宴に先だって調査審判が行なわれることが明示されている。婚宴に先だって、王は、すべての客が、礼服、すなわち、小羊の血で洗って白くしたしみのない品性の衣を着ているかを見るために入ってくる（マタイ 22：11、黙示録 7：14 参照）。・・・品性を調査し、だれが神の国に入る準備をしたかを決定するこの働きが、調査審判の働きであり、天の聖所における最後の働きなのである」（大争闘下 145）。

これらすべての聖句はみな同じ事件を描写している：

ダニエル 8：14 「彼は言った、『二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する』。

マタイ 25：10 「彼らが買いに出ているうちに、花婿が着いた。そこで、用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやに入り、そして戸がしめられた」。

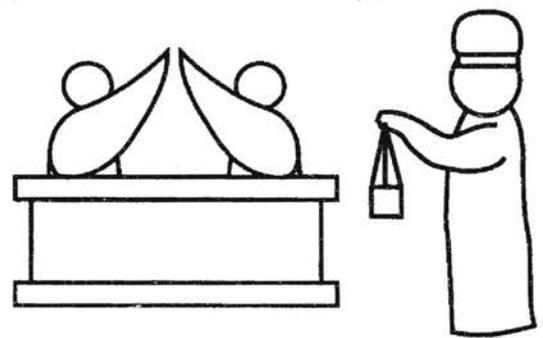
マタイ 22：3 「王はその僕たちをつかわして、この婚宴に招かれていた人たちを呼ばせたが、その人たちはこようとはしなかった」。

マタイ 22：11 「王は客を迎えようとして人ってきたが、そこに礼服をつけていないひとりの人を見て」。

マラキ 3：1 「...またあなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る」。

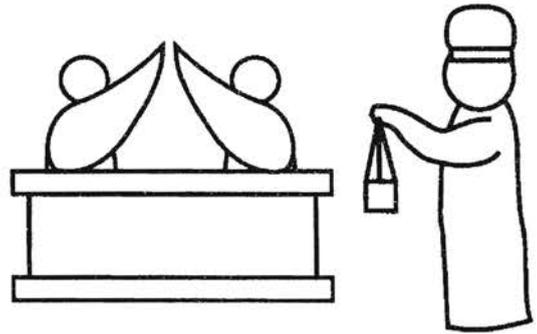
マラキ 3：3 「彼らは銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる」。

ダニエル 7：13, 14 「わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。彼に主権と光栄と国とを賜い...」。



最後のあがない

では結婚式に出席するためにどのように招待を受け入れたらいいのだろうか？



祭司が最後のあがないをしている。
婚礼（結婚式）とも呼ばれている。

「1844年の夏の『さあ、花婿だ』という宣言は、多くの者に、主の再臨はすぐだと期待させた。その指定された時に、花婿は、人々が期待したように地上に

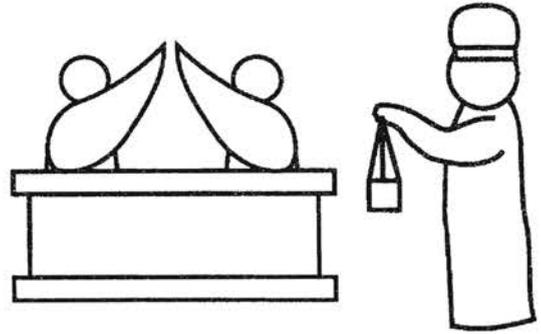
ではなくて、婚宴のために、すなわちみ国を受けるために、天の日の老いたる者のもとに来たのである。『用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやにはいり、そして戸がしめられた。』彼らは、婚宴の席に列することはできなかった。なぜなら、これは天において起こり、彼らは地上にいるからである。キリストの弟子たちは、『主人が婚宴から帰って』く

るのを『待つて』いなければならない（ルカ12：36）。・・・これらの人々は、天の聖所に関する真理と、救い主の務めの変化とを認め、信仰によって、天の聖所における彼の働きに従っていった。そして、聖書のあかしをとおして同じ真理を受けいれ、キリストが仲保の最後の働きを行なうために、そしてその最後にはみ国を受けるために、神の前に出られるのに信仰によって従っていく者たちは、すべて、婚宴のへやにはいるものとして表わされているのである」（大争闘下 143. 145）。



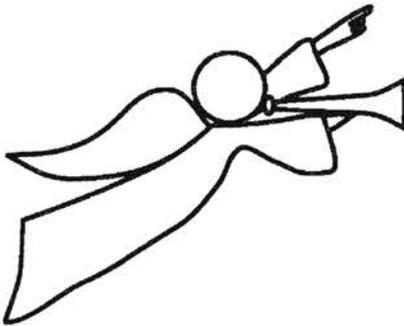
われわれは、キリストが結婚式に行かれるとは何を意味しているのかを理解しなければならない。至聖所における彼の働きを理解することによって結婚式に行くのである。キリストの最後の仲保の働きについての真理を理解し、受け入れることによって、招待状を受け入れるのである。

「これらの人々は、天の聖所に関する真理と、救い主の務めの変化とを認め、信仰によって、天の聖所における彼の働きに従っていった。そして、聖書のあかしをとおして同じ真理を受けいれ、キリストが仲保の最後の働きを行なうために、そしてその最後にはみ国を受けるために、神の前に出られるのに信仰によって従っていく者たちは、すべて、婚宴のへやにはいるものとして表わされているのである」(大争闘下 145)。



最後のあがないは
婚礼(結婚式)とも呼ばれている

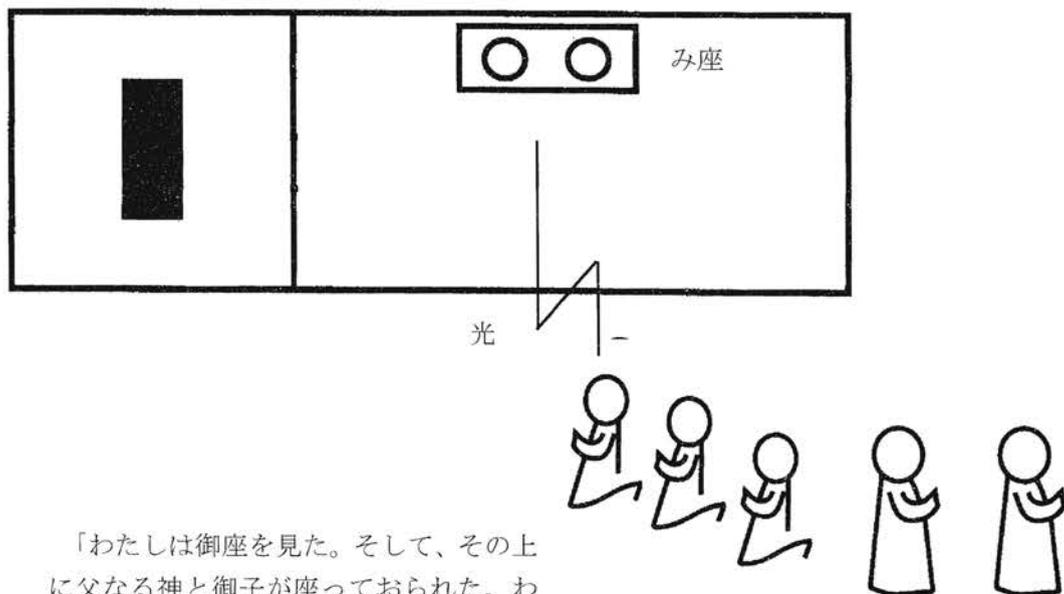
我々が結婚式に出るといのは、最後の仲保の働きを理解することによるのである。



「第三の天使は、『ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返したときに、天の聖所を指した。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。イエスはそこで箱の前に立って、恵みがなお与えられているすべての人々と、知らずして神の戒めを破った人々のために最後の仲保をしておられるのである。この贖罪は、生きている義人とともに、死んだ義人のためにも行われる。これは、キリストを信じて死んだすべての人を含んでいるが、彼らは神の戒めに関する光を受けなかったために、知らずして戒めを破って罪を犯したのである」(初代文集 414-415)。

上述の引用文で、第三天使は第三天使の使命を受け入れるすべての者の心を最後の仲保、あがないと呼ばれる働きに向けることに注目していただきたい。もし最後の働き、また仲保の働きが「このあがない」と呼ばれるなら、それは最後のあがないであり、最終のあがないである。つまり、第三天使は神の民を最後のあがないと呼ばれる、贖罪の最後の働きに指し向けることを意味する。

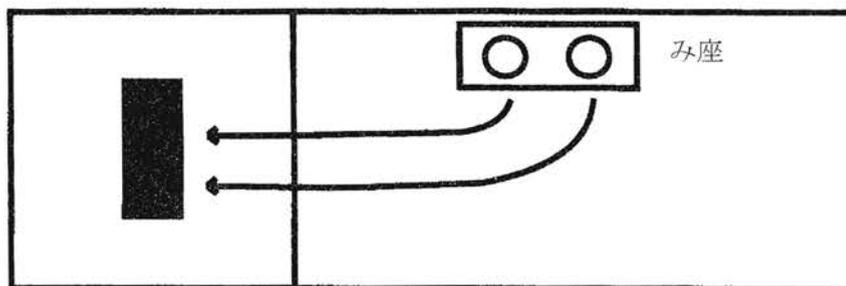
次の幻は、結婚式への招待を受け入れない者たちにはどんなことが起こるかをさらにくわしく教えてくれる。覚えていただきたい：われわれが結婚式に行くのは至聖所におけるキリストの働きを理解することによってであることを。



「わたしは御座を見た。そして、その上に父なる神と御子が座っておられた。わたしは、イエスのお顔をじっと見つめて、彼の美しい姿を賛美した。わたしは、父なる神のお姿を見ることはできなかった。それは、栄光に輝く雲が、神をおおっていたからである。わたしは、父なる神が、イエスご自身と同じような姿をしておられるかを、イエスにたずねた。イエスは、同じ姿であると言われた。しかし、わたしは、その姿を見ることはできなかった。『もし、あなたが神のお姿の栄光を見たならば、生きていることはできない』とイエスが言われたからである。わたしは御座の前に、再臨信徒たちを、すなわち教会と世俗とを見た。わたしは二つの群れを見た。一つは、深い関心をもって、御座の前に頭を下げていた。もう一つの群れは、無関心で不注意な態度で立っていた。御座の前で頭をたれていた人々は、祈りをささげて、イエスを仰いだ。するとイエスは、父なる神を仰ぎ見て、神に訴えておられるようすであった。光が、父なる神から御子に輝き、そして御子から、祈っている群れへと輝いた。その時、わたしは、特別に明るい光が、父なる神から御子に輝き、御子から御座の前にいる人々へと及んでいくのを見た。しかし、この大きな光を受けいれるものは、ほとんどなかった。多くの人は、その下から出て来て、直ちにそれに反抗した。他の人々は関心を示さず、その光を受けいれなかった。そのため、光は彼らから去っていった。ある人々は、それを受けいれて、祈っている群れのところへ行って、彼らとともに頭を下げた。この群れはみな、光を受けて喜び、彼らの顔は栄光に輝いた。(つづく)

わたしは、父なる神が御座から立たれて、炎の車に乗って幕のなかの至聖所に入られ、お座りになるのを見た。それから、イエスが御座から立ち上がられた。そして、頭をたれていた人々の大部分が、彼とともに立ち上がった。わたしは、イエスが立ち上がられた

後で、無関心な群衆には、イエスから一条の光も輝かなかったのを見た。そして、彼らは全くの暗黒の中に取り残された。イエスが立たれたときに立った人々は、彼が御座を立て、彼らを



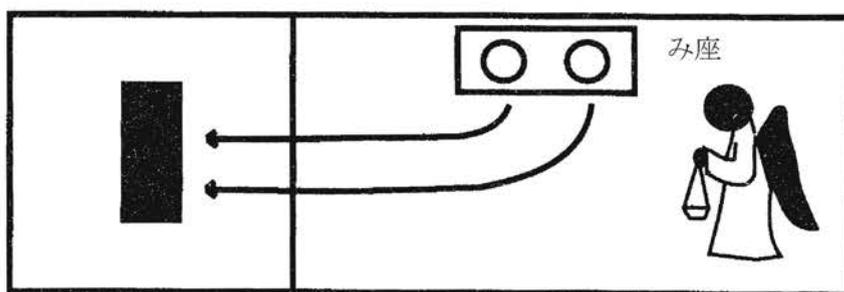
少しばかり導き始められるの

をじっと見つめていた。するとイエスは、彼の右の手を上げられた。そして、われわれは、彼がうるわしい声で、『ここで待っていなさい。わたしは、わたしの父のところへ行って御国を受けてくる。あなたがたの衣を汚さないようにしていなさい。しばらくすれば、わたしは婚宴に帰って来て、あなたがたを、わたしのところに迎えよう』と言われるのを聞いた。そのとき火の炎のような輪がついた雲の車が、天使たちにかこまれて、イエスがおられるところに来た。彼は、その車に乗って、父なる神が座っておられる至聖所にはいっていかれた。そこでわたしは、父なる神の前に立っておられる大祭司イエスを見た。彼の衣の縁には、鈴とざくろがあった。イエスとともに立った人々は、至聖所のイエスを信仰をもって仰いで、『わが父よ、あなたの霊を与えてください』と祈るのであった。すると、イエスは、彼らに聖霊を注がれた。その息吹のなかに、光と力、そして多くの愛と喜びと平和があった。(つづく)

上の引用文に注目しよう：イエスはみ国を受けるために至聖所に入られる。彼は従う者たちに「わたしが結婚式から帰って来るまで待っていなさい」と言われる。これはイエスが至聖所におられる間に結婚式がなされることを示している。み座に向かって祈っている一つのグループは、キリストが結婚式に行かれたときに信仰によって付き従っていく者たちである。このグループが聖霊を祈り求めていると、聖霊が注がれる。

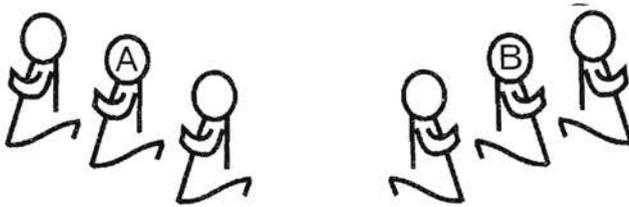
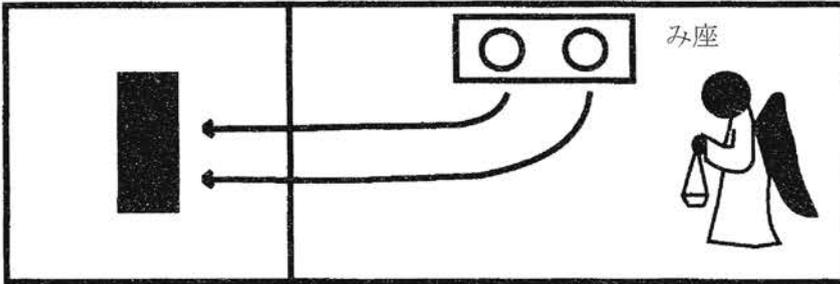
わたしは、御座の前でまだ頭をたれている人々を見ようと思ってふりかえった。彼らはイエスがそこを去られたことを知らなかった。サタンは御座のそばで、神の働きを行おうとするかのように見えた。わたしは、彼らが、御座を見上げて、『父よ、あなたの霊をお与えください』と祈るのを見た。するとサタンは、彼らに汚れた力を吹きこむのであった。それには、光と多くの力とがあつた。しかし、あたたかな愛、喜び、平和はなかった。サタンの目的は、神の子供たちを欺いて、彼らを引きもどし、惑わすことであつた」(初代文集 124-127)。

最後のあがないと結婚式
は至聖所で執り行われる



キリストが結婚式に行かれたとき、信仰によって従わないで聖所に残っていた礼拝者のグループはサタンを礼拝し始める。彼らも聖霊を祈り求めるが、偽りの霊を受ける。結婚式は最終的な仲保、また最後のあがないの働きである。これらのグループは字義通りに天にいるのではない。前に学んだように一つのグループは、至聖所においてなされるキリストの働きを理解することによって結婚式に出席する。聖所に残って礼拝する者たちは、聖所以上のことを理解しないのでそこに留まったままである。もし、最後のあがない、また結婚式が至聖所で執り行われるのであれば、聖所に残っているグループは最後のあがない、結婚式のことは理解しないのである。この事を理解しないなら、この人たちはこのあがないの必要も感じないので、サタンを礼拝し始めることになる。サタンを礼拝することは心霊術(唯心論)である。

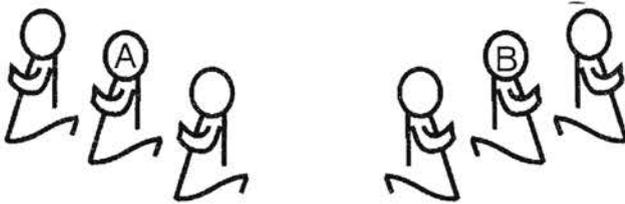
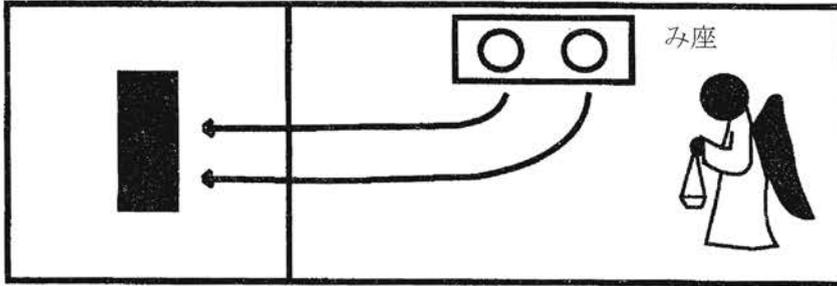
サタンを礼拝すること、心霊術は三天使の使命を拒む結果である。



「第一の使命を拒んだ者は、第二の使命からも益を受けることができなかった。夜中の叫びによって、人々は、信仰によってイエスとともに天の聖所の至聖所に入る準備をなすべきであったが、その夜中の叫びも役には立たなかった。はじめの二つの使命を拒んだために、理解力の暗くなった彼らは、至聖所に至る道を照らしている第三天使の光を見ることができなかった。名目的諸教会は、ユダヤ人がイエスを十字架につけたように、これらの使命を十字架につけ、そのために彼らは、至聖所へはいる道を知らず、そこにおられるイエスの仲保の恵みを受けることができないことを、わたしは見た。彼らは、無益な犠牲をささげていたユダヤ人のように、イエスが去ってしまわれた部屋に向かって、彼らの無益な祈りをささげている。そして、この欺瞞に満足したサタンは、宗教的性格を装って、彼の力とするしと奇跡を行い、これらの自称クリスチャンたちの心を、彼自身に引きつけ、しっかりと彼のわなに捕らえてしまうのである」(初代文集 423-424)。

どのように至聖所に入っていくかを教えるのは三天使の使命の理解によるのである。これらの使命を拒んだグループは聖所のサタンに祈っていた者たちである。この人々は至聖所において行われる結婚式に入って行かない者たちである。

礼拝者を至聖所に指し向けたのは三天使の使命であった。聖所に残っていた者たちはこれらの使命を拒んだ。その結果に注目してください。



「諸教会が、第一天使の使命を受けることを拒んだときに、彼らは、天からの光を拒否し、神の恵みを失った。彼らは、自分たち自身の力に頼った」(初代文集 390-391)。

「数人のかたが、信仰による義認は第三天使の使命ですかとわたしに問い合わせてきた。わたしは『それは第三天使の使命そのものです』と答えた」(1 SM 372)。

上述の文は第一天使の使命を拒んだことは、自らの力に頼る結果になると言っている。だから、聖所に残ったままのグループは、最後のあがないのために至聖所に入っていこうとしないので自分たちの業、行いに頼る結果になる。第三天使の使命は信仰による義認「そのもの」である。第三天使の使命を拒むことは信仰による義認の使命を拒むようになるのであり、その結果人は自らの業に依存することになるというのである。自らの業に頼る人は自分自身を救い主とするのである。

「すでにわが民の間に心靈術的教えに心を向ける者たちの信仰を突き崩す教えが入りつつある。・・・これらの理論はその論理に従っていくとその結論はすべてのキリスト教典礼を押し流してしまう。それはあがないの必要を押し流し、人間を自らの救い主にしてしまう」(8 T 291)。

「過去の経験が繰り返されるであろう。将来、サタンが新しいかたちを装うであろう。誤りがたのしそうな、うれしがらせるような方法で提示されるであろう。偽りの理論が光の装いをして神の民に提示されるであろう。このようにしてサタンは、できるならば選民をも惑わそうとするのである。もっとも魅惑的な影響を及ぼすであろう。心は催眠術にかけられたように魅了されるであろう」(8 T 293)。



「だまされてはならない。多くの者は信仰を離れ、惑わす霊と悪魔の教えに心を向けるであろう。今や、我々の前にこの危険なアルファがある。オメガは最も驚くべき性質のものである」(1 SM 197)。



上述の引用文はケログ博士によってもたらされた汎神論に関して言われたものである。しかし、覚えていただきたいことは、歴史は繰り返されるということ、そして誤りが新しいかたちでやってくることである。故に、われわれはすべての教えの論理を追ってどんな結論に持っていくかを見分けなければならない。上述の文によると、心靈術的なアルファの教えはその論理を追っていくと次のような結果になると言っている：

1. あがないの必要を払いのける
2. 人間自らを救い主とする

故に、今日の心霊術的な教えを注意するためにはそれらの教えの論理がどのような結論に持っていかを見守る必要がある。前の章で見た幻によると、聖所に残って礼拝していた者たちはどうなったかというと：

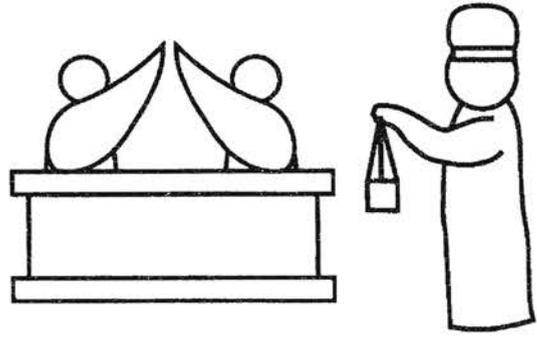


1. サタンを礼拝し始めた
2. あがないの必要を感じない
3. 自らの力、業に頼るようになった

これらが背教のアルファと呼ばれた心霊術的理論の特徴そのものであった。これらの誤りがまた繰り返されるので注意するようにと警告されている。教会に入り込んでくると預言されている心霊術的教えは、最後のあがないの必要を拒むことになる。このグループ（B）は聖所に向かって祈り、偽りのみ霊のそそぎを受けたのである。



このグループ（A）は結婚式のために至聖所に入って行った。彼らは最後のあがないの必要を感じている者たちである。このグループが聖霊のそそぎを受けたのである。故に、いかなる教えであっても、至聖所においてなされる最後のあがないの必要を曲解し、無視し、その必要を認めないならば、教会への証8巻に描写されている心霊術的教えになるのである。これは結婚式に行くということはどんなに重要であるかということを実証している。



この章では神の言葉は婚礼（結婚式）に来るように我々を招いているという概念を紹介した。われわれが結婚式に行く唯一の方法はあがないの日を起こることを理解することによって結婚式に行くことができるということである。故に、その結婚式に出席するための必要な理解を持つための真理を研究したいのである。



聖所の仲保の働き

結婚式への招待を受け入れるためには聖所の奉仕を理解する必要がある。この章では、聖所の日毎の奉仕を理解し、それが結婚式への招待を受け入れることとどのように関係するかを発見してみよう。

「婚姻は、人性と神性との結合を表す」（実物教訓 287）。

「我々が神の性質にあずかるときに、遺伝的、後天的悪への傾向は品性から切り取られるべきである」（7 B C 943）。

上の文は我々の人性が神の性質にあずかるときに、遺伝的、後天的悪への傾向は品性から取り除かれると言っている。結婚式は、人性と神性との結合である。故に、結婚式は先天的、後天的罪への傾向を切り取ってしまうとすることができる。神との関係を発達させるのはこの過程である。前の章でわれわれ礼拝者は至聖所に入ることによって結婚式に行ったことを学んだ。故に、結婚式に行くと言うことが何を意味するかを理解するためには、全聖所の奉仕を学ぶ必要がある。

詩篇 77：13 欽定訳「おお、神よあなたの道は聖所にある。我らの神のように大いなる神はだれか」。

ヨハネ 14：6 「イエスは彼らに言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない』」。

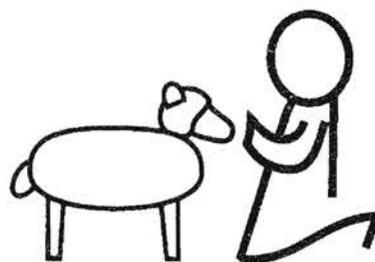
上の聖句はキリストは道であると言い、その道は聖所に実証されていることを述べている。それ以外の道はないのである。人類が墮落したとき、神に受け入れられなくなった。人類にもたらされた結果は、永遠の絶望という闇夜のようなものであった。しかし、神は罪人に逃れの道を備えてくださった。罪人は神が備えてくださった方法に従って死から救われるのである。人間が神に受け入れられ、墮落前に持っていた完全を回復する道は聖所の奉仕にたとえ話のようにあらまし描かれている。この回復は人性と神性の結合をあらゆる結婚のように、神との関係を必要とする。

聖所の奉仕に救いの計画のステップが象徴的に教えられている。このページでは、神に受け入れられるために必要なステップの概要を述べてみたい：

罪祭：悔い改めと告白

レビ 4：28, 29 「その犯した罪を知るようになったときは、その犯した罪のために供え物として雌やぎの全きものを連れてきて、その罪祭の頭に手を置き、燔祭をほふる場所で、その罪祭をほふらなければならない」。

最初のステップは、罪人はキリストを表す子羊の頭に手を置いて自分の罪を告白するのを見ます。これは人間は悔い改めと告白が必要であることを教えています。子羊が殺され祭司によってその血が聖所に移されるということは、身代わりが必要であることを、また人間が神に受け入れられるためには仲保者が必要であることを実証している。



罪人が神に受け入れられるために供え物をささげる。

ヘブル 9：22 「こうして、ほとんどすべての物が、律法に従い、血によってきよめられたのである。血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない」。

神の律法が違反されたので、正義は罪人の死を要求する。われわれの身代わりとしてキリストを表す子羊が血を流すことによって我々は許され、神に受け入れられるのである。

レビ 17：11 「肉の命は血にあるからである。あなたがたの魂のために祭壇の上で、あがないをするため、わたしはこれをあなたがたに与えた。血は命であるゆえに、あがなうことができるからである」。

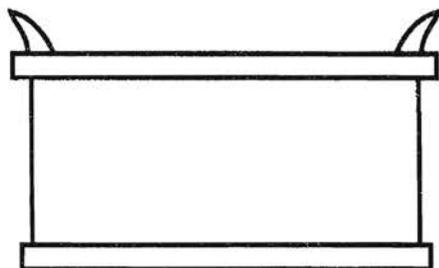
あがない (atonement) という言葉の意味は、AT-ONE-MENT (ひとつになる) を意味する。あがないは罪人によって子羊が殺されることによってなされた。これは人間は身代わりの命また子羊であるキリストの死によってのみ救われることを教えている。

燔祭の壇：献身

聖所に見る次のクリスチャン経験のステップは燔祭の壇である。小羊が祭壇に置かれ犠牲として捧げられた。キリストはカルバリーで捧げられたのでこれはカルバリーを表す。

出エジプト 29：18「その雄羊をみな祭壇の上で焼かなければならぬ。これは主にささげる燔祭である。すなわち、これは香ばしいかおりであって、主にささげる火祭である」。

出エジプト 40：29「燔祭の祭壇を会見の天幕なる幕屋の入り口にすえ、その上に燔祭と素祭をささげた。主がモーセに命じられたとおりにである」。



犠牲の頭の上に罪が告白されて後、その動物は殺された。その死体は燔祭の壇に置かれたのである。

ローマ 12：1「兄弟たちよ、そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧めらる。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である」。

小羊が祭壇で捧げられたように、キリストはカルバリーで捧げられた。そのように我々も生きた供え物としてからだを捧げるのである。神に自分自身を全く捧げる決心をする。祭壇に自分自身を置くのである。これが献身である。神への無我の奉仕の生涯を生きるために献身するのである。献身が救いの次のステップである。

洗盤：新生



出エジプト 30:18「あなたはまた洗うために洗盤と、その台とを青銅で造り、それを会見の幕屋と祭壇との間に置いて、その中に水を入れ」。

洗盤の目的は洗うことである。洗盤の位置は、その意味を理解するのに重要である。洗盤は燔祭の壇と幕屋の間に位置していた。幕屋の中の器具はみ言葉の学びと祈りと聖霊を表していた。外庭の器具は悔い改め、告白と献身を表していた。洗盤は、外庭の器具と幕屋の中の器具の間であって、我々がみ言葉の研究と祈りと聖霊の祝福を受ける前に清められる必要があることを示している。その清めは新生と呼ばれ、毎日必要とされる。

テトス 3:5「わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである」。

礼典律のすべての洗いは、新生の必要を教えている。

「罪によって汚された魂は腐敗した死体で表されている。礼典律に要求されている洗い、そそぎという象徴は、とがと罪に腐敗した魂の心になされる新生の必要と聖霊の清める力の必要を教えている」(4 B C 1176)。

ここで聖所と「キリストへの道」を比較してみよう：
 キリストへの道の最初の章は「人類に対する神の愛」、第2章「キリストの必要」、第3章「悔い改め」、第4章「告白」、第5章「献身」。これらの章は信仰による義認の経験のステップで、聖所の奉仕に描かれているステップと同じである。第6章は「信仰と神の受け入れ」で、その章にキリストへの道と聖所の概要とが同じであることがまとめられている。

「あなたは自分の罪を告白して、心よりこれを捨て去り、神に自らをささげようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き罪を洗い去って新しい心を与えたまえとお願いなさい。そして、神がお約束なされたのですから、そうしてくださると信じなさい」(キリストへの道 63)。

聖所の器具は
 聖化における
 ステップを表す

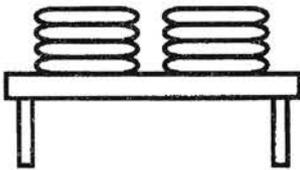
外庭でなされることは
 信仰による義認の
 ステップを表す



イスラエルの民は聖所に礼拝に来る度ごとに信仰による義認のステップを教えられたわけである。

今や彼らは、聖所で何がなされるかを理解した上で、信仰によって聖所に入っ
ていったのである。聖所の奉仕は3つの器具を中心になされた：パンの机、香壇、
金の燭台。簡単に言ってこれらの器具は、クリスチャン経験の聖化を象徴してい
る。

パンの机：み言葉



『神のパンは、天から下ってきて、この世に命を
与えるものである』。彼らはイエスに言った、『主よ、
そのパンをいつも私たちに下さい』。イエスは彼ら
に言われた、『わたしが命のパンである。わたしに来
る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者
は決して乾くことがない』(ヨハネ 6：33-35)。

キリストは言葉とも言われている。肉体の生命を維持するためには字義通りパ
ンを食べなければならないように、霊的な生命のためにパンを食べなければなら
ない。

「キリストのみことばを食べるときに、彼らは、それが霊でありいのちであるこ
とを知る。みことばは、生れながらの世俗的な性質を滅ぼし、イエス・キリストの
うちにある新しいいのちを与える。・・・彼は新しい人間となる。愛が憎しみに入れ
代り、心は神のみかたちにかたどられる『神の口から出る一つ一つの言で生きる』
というのは、このことである(マタイ4：4)。これが天からくだるパンを食べる
ことである」(各時代の希望中 141)。

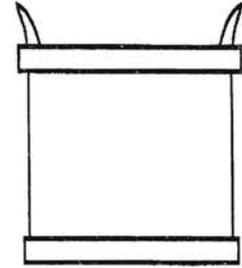
机の上のパンは聖書研究を象徴している。クリスチャン生活の成長においてみ
言葉の研究は必須である。この成長が聖化と呼ばれている。

香壇：祈り

出エジプト 30:7.8「アロンはその上で香ばしい薫香をたかなければならない。朝ごとに、ともしびを整える時、これをたかなければならない。アロンはまた夕べにともしびをともし時にも、これをたかなければならない。これは主の前にあなたがたが代々に絶やすことなく、ささぐべき薫香である」。

黙示録 8:3「また、別の御使いが出てきて、金の香炉を手を持って祭壇の前に立った。たくさんの香が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒たちの祈りに加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのものであった」。

黙示録 8:3.4「また、別の御使いが出てきて、金の香炉を手を持って祭壇の前に立った。たくさんの香が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒たちの祈りに加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのものであった。香の煙は、御使いの手から、聖徒たちの祈りと共に神のみまえに立ちのぼった」。



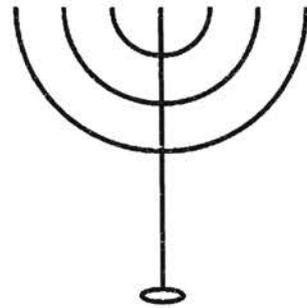
香壇から立ち上る香は聖徒達の祈りを表している。故に、香壇はクリスチャン生活における祈りの必要を教えている。

「悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪へおびき入れます。それというのも、ただ私どもが、神の定めたもうた祈りの特権を用いないからであります。・・・敵は恵みのみ座への道をさえぎって、私どもが熱心な祈禱と信仰によって、誘惑に耐えうる恵みと力を受けることができないように絶えず働いています」(キリストへの道 129)。

み言葉の学びと祈りは罪に勝利し、誘惑に抵抗するために必要である。故に、聖化の一部として聖所の奉仕に教えられている。

燭台：聖霊

黙示録 4:5「御座からは、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが、発していた。また、七つのともし火が、御座の前で燃えていた。これらは、神の七つの霊である」。



ヨハネ 6:63「人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」。

「みたまは誤りをばくろし、それを魂から追い出される。・・・悪の力は幾世紀にわたって強められ、人々がこのサタンのとりことして屈服していることは驚くばかりであった。罪に抵抗してこれに打ち勝つ唯一の道は、制限された力ではなく天来の満ち足りた力をもってこられる第三位の神、聖霊の偉大な働きを通してのみである。・・・すべての先天的後天的な悪の傾向に打ち勝つ天来の力として、またご自身の品性を教会に印象づける天来の力として、キリストはみたまをお与えになった」(各時代の希望下 156. 157)。

燭台は光を放つ。クリスチャンの生活に光を輝かせなければならない。われわれのランプに油があるなら、他の人に分かち与えるはずである。この机のパン、香壇の香、燭台の油はすべてクリスチャン生活において罪に勝利する方法を教えている。聖所の中のこれらの器具はみ言葉の学び、祈り、聖霊または分かち与えることを象徴している。

聖所の奉仕は3つの器具を中心になされる。パンの机、香壇、燭台。これらのものの意味を調べると、クリスチャン経験の聖化のステップを表していることが分かる。

聖所の器具は
聖化における
ステップを表す

外庭でなされることは
信仰による義認の
ステップを表す



今までの聖所のことを復習してみよう：今までの聖所の奉仕は、義認と聖化の過程の概要を表している。外庭と、聖所の中の働きで表されていることは、罪に対する勝利のすべてのステップである。そのために、しばしば人々は贖いの時に住んでいる者たちに理解するように要求されていることはこれですべてであると思っている。それが礼拝する者たちが聖所にとどまったままである理由である。しかし、キリストが至聖所に入って行かれたときに、キリストに従って至聖所に入った者たちが聖霊のそそぎを受けたグループである。聖所に残ったままの者たちはサタンを礼拝し始めたのである。それ故に、結婚式に行くためには至聖所でなされる最後のあがないの働きを理解することは非常に重要である。

仲保者

日毎の礼拝の奉仕で仲保者が必要であることを理解するためには、礼拝 (worship) の意味を理解しなければならない。worship (礼拝) は二つの言葉から成り立っている：

1. worth: 価値 或いはねうち
2. ship: ~の状態

だから、worship = 礼拝とは、価値あるいはねうちある状態を持つということになる。



神の律法は
無我の律法であった。

どの原則に基づいて
価値を決めるか？



他の神々は
自己称揚の原則を示している

人が神のご品性と無我の律法こそ価値ある状態だと思ったときに、神を礼拝するようになる。神の律法に完全に従う業だけが価値がある。神の律法に厳格に従うことから離れるいかなる業も利己主義、自己本位に価値を見出すことを意味する。

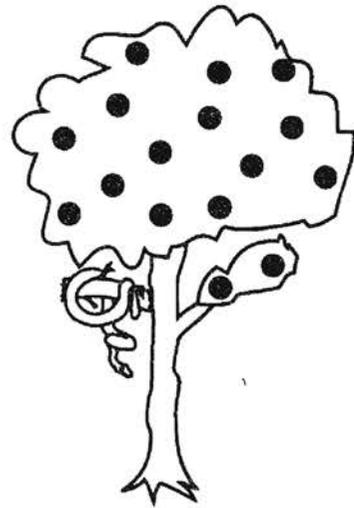
サタンを礼拝することは、神が言われたことよりもサタンが言ったことがもっと価値があると人が思ったときエデンで始まった。

創世記 3:5 「それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。



ただ人の心には善の知識だけ

善の知識だけなら
人の業は神と共に
価値があった



善悪を知る木

神とは価値、値打ちがあるから礼拝されるものと定義されよう。上の聖句によると、サタンは人間に善悪の知識を持つと神のようになれるし、価値、ねうちがあると信じさせようとした。ただ善、義だけが価値があるのであり、人間が悪の知識を得るようになると、人間の品性と業はもはや価値がない。サタンが言ったことに従った結果、人間の業というのは利己主義＝自己本位で汚れてしまったのでもはや神の前に価値あるものではなくなった。この悪の知識の故に人間は神の前に受け入れられるためには仲保者を必要とした。もしサタンが善悪の知識を持ったまま価値があると信じさせることができれば、人の業は価値があることになり、仲保者を必要としないのである。

悪の知識



善悪の知識をもっては
人間の業（行い）は
価値がない

日毎の奉仕は罪人のために祭司が仲保者として立つことを要求した。聖所の奉仕を理解するためには仲保者の働きを理解しなければならない。



ご自分の血をもって贖いをなさる我々の仲保者であるキリストを代表する祭司。

テモテ第一 2:5「神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである」。

ヨハネ 14:6「イエスは彼に言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない』」。

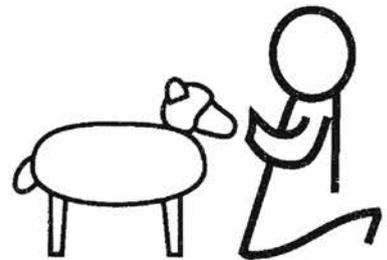
ローマ 6:23「罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである」。

「わたしによらないでは父のみもとにだれも行くことができない」と言われたキリストの言葉は、人間が神の前に受け入れられるためにはキリストの仲保が絶えず必要であることを教えている。

日毎の奉仕で、罪人は小羊をつれて来て、罪の許しを乞うのである。しかし、その血を聖所に持っていく祭司がいなければならない。

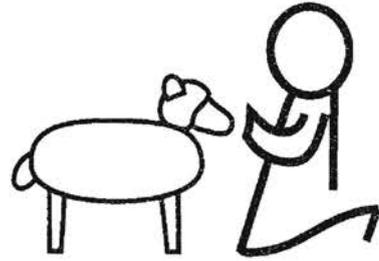
レビ 4:6「そして祭司は指をその血に浸して、聖所の垂幕の前で主の前にその血を七たび注がなければならない」。

レビ 17:11「肉の命は血にあるからである。あなたがたの魂のために祭壇の上で、あがないをするため、わたしはこれをあなたがたに与えた。血は命であるゆえに、あがなうことができるからである」。



地上の聖所における祭司の働きは、天の聖所で執り行われることを示している。上述の聖句から、キリストは天の聖所でご自分の血を提示することによって贖いをしておられることを学ぶことができる。魂のために贖いをするのは血であることを明確に告げている。

黙示録 5:8「巻物を受けとった時四つの生き物と二十四人の長老とは、おのおの、立琴と、香の満ちている金の鉢とを手を持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒の祈りである」。



罪人が小羊を連れてきて罪の許しを乞うとき、祭司は血をとらなければならなかった。しかし、罪人の祈りを表す香も持った。香は聖所の中で捧げられるのであった。祭司が聖所に香を持っていくということは、罪人の祈りは仲保者によって神のみ前に届けられるということを表しているのである。

黙示録 8:3「また、別の御使いが出てきて、金の香炉を手を持って祭壇の前に立った。たくさんの香が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒たちの祈りに加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのものであった」。



もし香が聖徒達の祈りを表すなら、その祈りと共に天に捧げられる香は、人間の祈りが神に受け入れられるようにするキリストの義の祈りであろう。聖徒達の祈りと共に香が捧げられなければならないという事実は、人間の祈りは欠陥があり、受け入れてもらうためには何かを加えられる必要があることを教えている。

黙示録 8:4「香の煙は、御使いの手から、聖徒たちの祈りと共に神のみまえに立ちのぼった」。

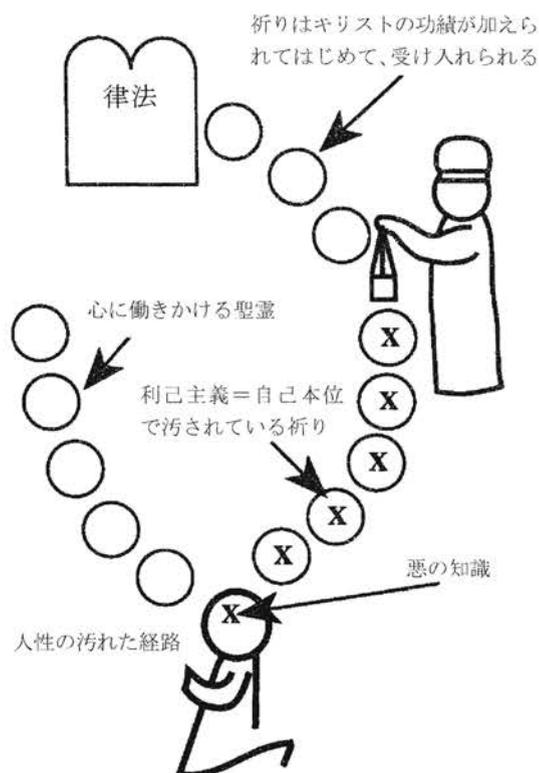
聖徒達の祈りと共に香煙が立ち上ることは、神はその祈りにご自分の功績をまぜてその結果神の前に煙が立ち上ることを意味していた。キリストが聖徒の祈りとご自分の功績を混ぜられた事実は今や祈りは神の前に受け入れられたことを意味している。

祭司は天において血と香を持って執り成しをされる。

天の聖所における 仲保の働き

「われわれの仲保者であられるキリストと聖霊は人間のためにたえず執り成しておられる。しかし、聖霊は世のはじめから流されたご自分の血を提示なさるキリストのように執り成されない。聖霊は我々の心に働いて我々の祈りとごんげと讃美と感謝を引き出される。我々の唇から流れ出る感謝は聖なる記憶の中の魂の弦に聖霊が触れ、心の音楽を呼び覚ます結果である。

宗教儀式や祈り、讃美や悔悟の念から来る罪の告白は、香のように真の信徒から天の聖所へと上っていく。しかし、人性という汚れた通路を通して成される。捧げられるこれらのものはあまりにも汚れているため、血によって清められない限り、神にとって価値あるものとは決してなり得ない。上っていても汚れのない純潔なものではないので、すべて神の右に座しておられる仲保者の義によって提示され清められない限り、神に受け入れられるものとはならない。地上の幕屋から立ち上る香りはすべて、キリストの血という清めの滴りでぬらさなければならぬ。彼は天父の前でご自分の功績の香炉を持っておられる。それは地上的な汚れのないものである。この香炉にご自分の民の祈り、讃美、告白を集め、これにご自分のしみのない義を加えられるのである。それから、キリストの和解の功績で香りをつけ、神のみ前に全く満足されるものとして香が立ち上ってくる。それから、恵みの答えが返ってくるのである」(1 SM 344)。



律法は完全な行いを要求する。上述の文章によると、信者の祈りは欠陥がある。なぜなら、それは人性という汚れた通路を通るからである。何が人間の通路を腐敗させたかという、悪の知識である。よく注意していただきたい。祈りは汚れのない純潔なものとして上っていかないのである。だから、神に受け入れられない。しかし、罪人には仲保者、身代わりがある。彼は罪人を救うために死なれたのである。罪人が祈るとき、イエスは自我で汚れている祈りをわたしの血で覆ってあげようと言われる。天においてキリストがご自分の功績を加えてはじめて祈りは受け入れられるのである。香とキリストの義なる祈りとキリストの血が信者の汚れた祈りに加えられるのである。これらが火に置かれる。その結果神の前に香煙が立ち上る。祈り（香）は神に受け入れられる。なぜなら、キリストの義が聖徒達の祈りに加えられたからである。そこで祈りが聞かれる。聖霊（火）は祈りが答えられるために地上に送られる。人間の汚れた通路である限り、その行い（業）は神の前に価値あるものとして決して受け入れられない。人間の内に働きかける聖霊の働きは、人間の業を完全にはしない。それが受け入れられるためには天においてキリストの執り成しの働きがなおも必要なのである。

天の聖所における 仲保の働き



「おお、服従、懺悔、讃美、感謝のすべては赤々と燃えているキリストの義の上に置かれなければならないことをすべての者が理解してほしい。この義の香りは贖罪所の周りに雲のように立ち上るのである」(1 SM 344)。

「服従、懺悔、讃美、感謝のすべては赤々と燃えているキリストの義の上に置かれなければならないことをすべての者が理解してほしい」。これは我々が罪を犯すときばかりでなく、服従しているときであっても仲保が必要であることをはっきり示している。

バビロンの功績

「またみずから高ぶって、その衆群の主に敵し、その常供の燔祭を取り除き、かつその聖所を倒した」(ダニエル 8:11)。

法王権を表す小さな角の描写である。この力は「常供(絶えざる)」を取り除くと預言されている。「燔祭」という言葉は付け加えられた言葉であり、そこにあるべきではない。カトリックの教えによって取り除かれた「常供」は天の聖所のキリストの絶えざる、日毎の奉仕である(初代文集155)。その聖所を倒すというのはキリストの贖いの働きが天の聖所の代わりに、地上の人間の内でなされるという教えによって倒されると言っているのである。

「だれも人間の業が自分の違反の負債を清算する何らかの方法で助けになるという限られた、狭い見解を持ってはならない。これは致命的な欺瞞である。それを理解したければ、あなたのつまらない考えで言い争うようなこと止めなければならない。そしてへりくだった心を持って贖罪を研究しなさい。この事に関してあまりにもぼんやりとしか把握されていないので、幾千幾万の人々が神の子と主張しながら悪しき者の子らである。なぜなら彼らは自分自身の業に頼っているからである。神はいつも良き行為を要求なさる。律法もそれを要求する。しかし、人間はその業を無価値にする罪の内に自分自身をおいてしまったので、イエスの義だけが役立つのである」(1 SM 343)。

「人は自らのわざによって自分自身を救うことができるという原則が異教のすべての宗教の根底にあった。・・・この原則を信じているところではどこでも、人は罪に対する防壁がない」(各時代の希望上 26)。

「現代のメッセージ信仰による義認一は神からのメッセージである。それは神からの信任状を持っており、その実は聖潔に至らしめるものだからである。・・・この主題に関して自分で聖書の真理を理解しているものは100人に一人もない。それは我々の現在と永遠の幸福に余りにも必要な主題である」(1 SM 359.360)。

上の文によると、信仰と行いの主題はまじめなクリスチャンによってしばしば誤解されているようである。自分の業(行い)によって救われようとする人は自分自身が救い主になる。第1章で学んだことを覚えているだろうか? つまり、唯心論の説をつきつめていくと、それは自分自身を救い主とする結論に導く。自分の業に頼ることは致命的なので、この事を理解することは非常に重要である。

法王制がなぜそんなに魅力があるのだろうか？ その力の秘訣は何だろうか？

「法王制はこれらすべての欲求によくかなっている。それはほとんど全世界を包含する二種類の人々――自分の功績によって救われようとする者と、罪の中にあつて救われようとする者――のために用意されている」（大争闘下 330）。

カトリックがどうしてそんなに人気があるかということは、人類の二つのグループのために備えられているからである。もし、汚れた欲情に従いたいなら、あなたはカトリックの教えによって救われることができる。しかし、宗教的で熱心に神に従おうと思っている人々に、彼らは自分たちの功績によって救われることができる信じ込ませるように欺くのである。

功績に関してカトリックの信条は何か？

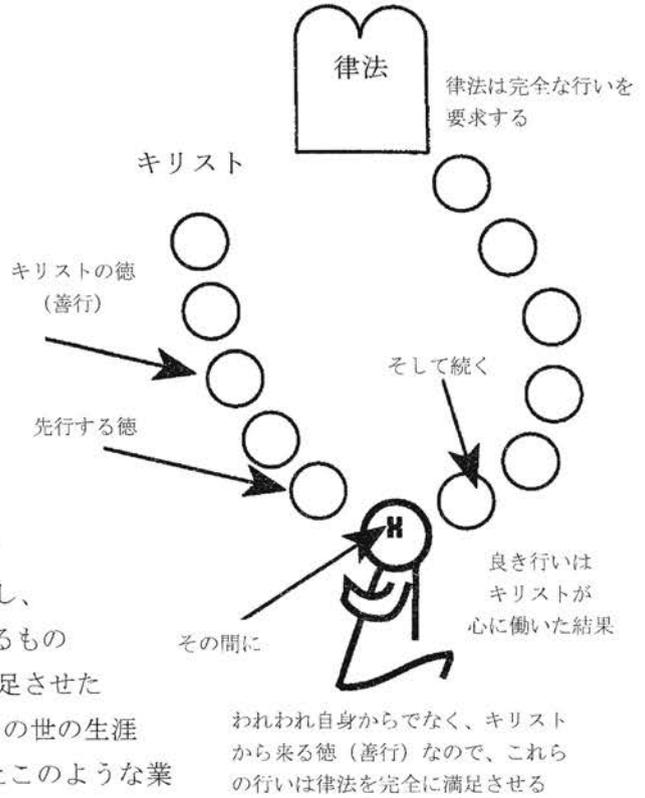
「キリストご自身が、頭から肢体へ、またぶどうの幹からその枝へつたえるように、絶えずその徳を義認された者たちに伝えるので（ヨハネ15：4）、――徳が彼らの良き業に先立ち、伴い、続く。それなくして決して神に喜ばれないし、価値がない――義認された者に欠けるものは何もないし、神の律法を完全に満足させたと考えられない理由は何もない。この世の生涯の状態に限り、神にあってなされたこのような業は、もし恵みの状態のうちに彼らが死ぬなら、やがてきたるべき永遠の生命を獲得するのに真に価値があるものである...」

「カトリックは永遠の生命は確かに神の哀れみと愛による無償の賜物と信じる。それはキリストの死によつてもたらされたものである。しかし、神は彼を愛し、彼に仕える者たちに報いとしてそれを約束されたが、我々が神の恵みを通して良き業を行うことは真に天において栄光を勝ち取る功績がある...」

「プロテスタントはしばしば、カトリックは彼らの良き業は、救い主イエス・キリストにでなく、彼ら自身の功績のせいにする信じている。これは事実ではない。カトリックはいかなる生来の行為も永遠の救いを受けるに価するものではないと信じる。我々は一人の仲保者イエス・キリストの功績なくして、また彼の贖いによつてすべての者のために勝ち取った神の恵みなくして天国のために何も成し得ないのである。『われらの力は神から来るのである』（コリント第二3：5）『わたしから離れては、あなたがたは何も成し得ない』（ヨハネ15：5）。すべての良き業は聖霊の働きの結果であり、彼と協力する我々の意志の結果である。『神の恵みの故に今のわたしがあるのである』（ハンデー カトリック辞書 質問箱〔カトリックの教理を説明している〕 331, 332, 333）。

前述の引用文を繰り返して、分析してみよう：

「キリストご自身が、頭から肢体へ、またぶどうの幹からその枝へつたえるように、絶えずその徳を義認された者たちに伝えるので（ヨハネ15：4）、――徳が彼らの良き業に先立ち、伴い、続く。それなくして決して神に喜ばれないし、価値がない――義認された者に欠けるものは何もないし、神の律法を完全に満足させたと考えられない理由は何もない。この世の生涯の状態に限り、神にあってなされたこのような業は、もし恵みの状態のうちに彼らが死ぬなら、やがてきたるべき永遠の生命を獲得するのに真に価値があるものである...」

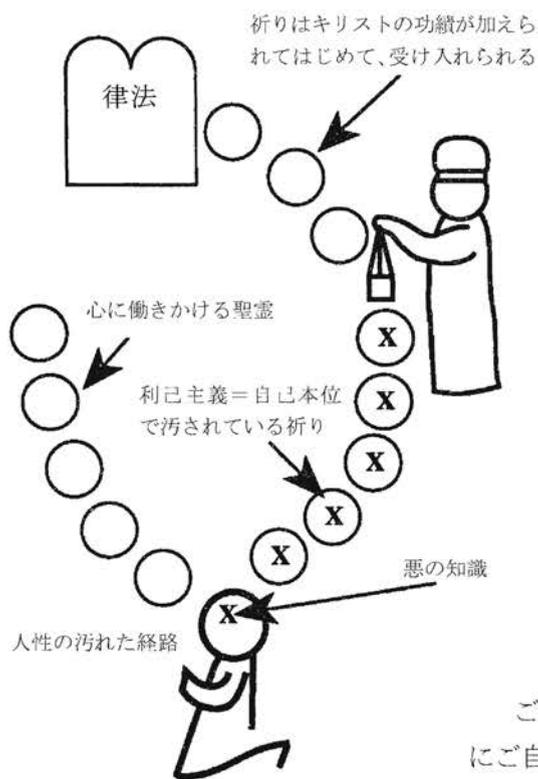


信者がなす良き業は聖霊が心の内に働く結果であることをはっきり述べている。心の中に聖霊が働く結果、その業は「神の律法を完全に満足させる」というのである。律法は律法の要求を満たすために完全な業（行い）を要求する。律法を完全に満足させるからその業（行い）は価値があり、功績がある。カトリックの説は功績は個人のせいにしていない。功績はキリストの功績としている。すべての栄光は人でなく、神に帰しているのである。

この教えの誤りは真理と比較したときにはつきりする。

「われわれの仲保者であられるキリストと聖霊は人間のためにたえず執り成しておられる。しかし、聖霊は世のはじめから流されたご自分の血を提示なさるキリストのように執り成されない。聖霊は我々の心に働いて我々の祈りとごんげと讚美と感謝を引き出される。われわれの唇から流れ出る感謝は聖なる記憶の中の魂の弦に聖霊が触れ、心の音楽を呼び覚ます結果である。

天の聖所における 仲保の働き



宗教儀式や祈り、讚美や悔悟の念からくる罪の告白は、香のように真の信徒から天の聖所へと上っていく。しかし、人性という汚れた通路を通して成される。捧げられるこれらのものはあまりにも汚れているため、血によって清められない限り、神にとって価値あるものとは決してなり得ない。上っていても汚れのない純潔なものではないので、すべて神の右に座しておられる仲保者の義によって提示され清められない限り、神に受け入れられるものとはならない。地上の幕屋から立ち上がる香りはすべて、キリストの血という清めの滴りでぬらされていなければならない。彼は天父の前でご自分の功績の香炉を持っておられる。それは地上的な汚れのないものである。この香炉にご自分の民の祈り、讚美、告白を集め、これにご自分のしみのない義を加えられるのである。

それから、キリストの和解の功績で香りをつけ、神のみ前に全く満足されるものとして香が立ち上ってくる。それから、恵みの答えが返ってくるのである」(1 SM 344)。

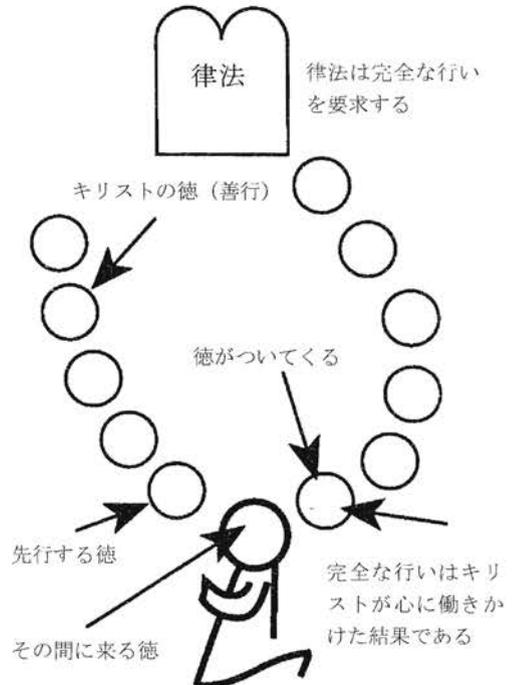
「おお、服従、懺悔、讚美、感謝のすべては赤々と燃えているキリストの義の上に置かれなければならないことをすべての者が理解してほしい。この義の香りは贖罪所の周りに雲のように立ち上るのである」(1 SM 344)。

復習

「彼らが自分自身の力と義にたよっているかぎり、罪の許しを得ることは不可能であった。彼らは、神の完全な律法の要求を満たすことはできず、神に仕えたと誓ってもむだであった。ただキリストを信じる信仰によってのみ、罪の許しが与えられ、神の律法に従う力を受けることができるのである。彼らが神に受け入れられようとするならば、自分の力にたよって救いを得ようとするのをやめ、約束の救いの功績に全的に信頼しなければならない」（人類のあけぼの下 157）。

クリスチャンが神に受け入れられるためには、キリストの功績に全く頼らなければならない。神の律法を完全に満足させるキリストの功績は、この地上でなく、天におられる我々の仲保者によって与えられる功績である。カトリックの功績という考えは、義とされた者はキリストの功績に全く頼ると主張する。しかし、キリストから来る功績はその人のうちに、その人を通して良き業（行い）を作りだしそれは律法を完全に満足させるというのである。しかし、あなたのうちに、あなたを通してなされる業はキリストから来るとは主張してもなお、あなたの業であり、あなたの業に功績ありとする結果になる。この考えはその論理を進めるとキリストの助けによってこの地上でなす業は、神の律法を完全に満足させるので、仲保者を必要としない結果になる。神の律法を地上で完全に満足させるなら、天において功績を付け加える必要はないであろう。この考えは致命的な欺瞞である。

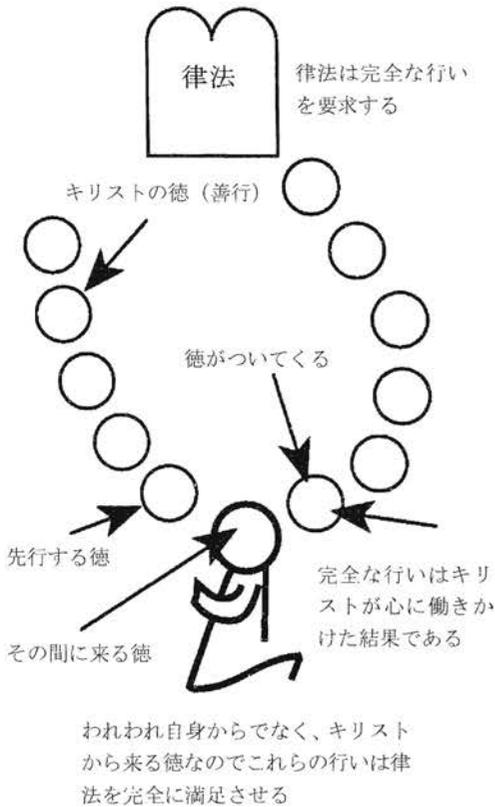
功績についてのカトリックの見解



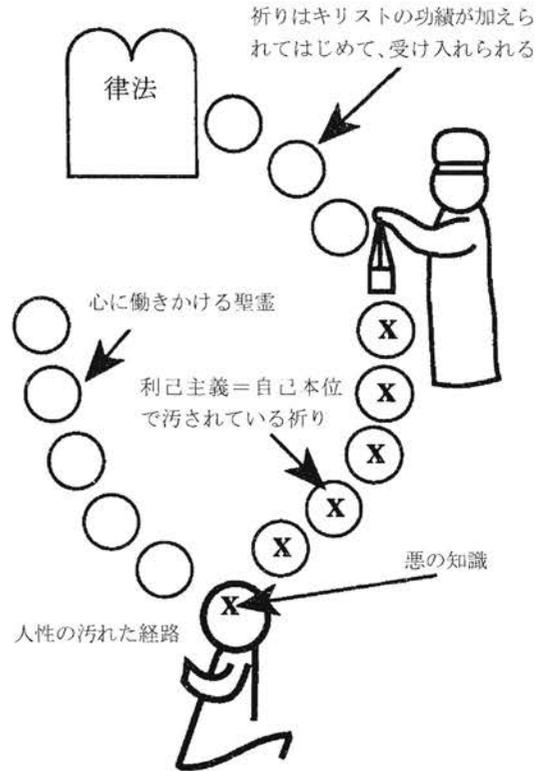
われわれ自身からでなく、キリストから来る徳なのでこれらの行いは律法を完全に満足させる

「すでにわが民の間に心靈術的教えに心を向ける者たちの信仰を突き崩す教えが入りつつある。… これらの理論はその論理に従っていくとその結論はすべてのキリスト教典を押し流してしまう。それはあががないの必要を押し流し、人間を自らの救い主にしてしまう」(8 T 291)。

功績についてのカトリックの見解



天の聖所における
仲保の働き



二つの考えを比較して見よ。カトリックの考えは、キリストから来る功績が人のうちに働いてそれが神の律法を完全に満足させるというのである。この論理を進めていくと、天におけるわれらの仲保者、キリストの贖いは別に必要ではなく、人の業は彼を救うことになる。故に彼が自分の救い主となる。カトリックの功績の教えは心靈術的理論である。

下にあげる引用文はその論理を追っていくとカトリックの辞書にあるような結論に導く。だから、これも心霊術的理論である。

「1889年7月11日のレビュー・アンド・ヘラルドにユライヤ・スミスは『われらの義』と題して社説を書いた。『われわれのためのキリストの働きのめざすところはわれわれを律法に戻すことである。すなわちそれにわれわれが従うことによって律法の義がわれわれのうちに成就するためである。そしてついに裁きのテストである律法の側に立つようになり、われわれは全くそれと調和するように見える...戒めを行うことにより、教えることにより確保されるべくわれわれが持たなければならない義があるのである』。

彼は痛烈な編集者への手紙を受けた！ 7月14日エレン・ホワイトは書いた：『今朝レビューにあなたの記事を読んだ。わたしの側に気品のある方が立って言われた、【ユライヤ・スミス】は敵のもうけた網に入っていく盲人のように歩いている、しかし光は彼に暗黒となり、暗黒は光となっている』と（RH 1988.9.3 [アドベンチスト・レビュー 1988.1.7] から引用）。

上の文と下の文を比較してみよう：

「――義認された者に欠けるものは何もないし、神の律法を完全に満足させたと考えられない理由は何もない。この世の生涯の状態に限り、神にあってなされたこのような業は、もし恵みの状態のうちに彼らが死ぬなら、やがてきたるべき永遠の生命を獲得するのに真に価値があるものである」（ハンデー カトリック辞書 質問箱 [カトリックの教理を説明している] 331.323）。

鍵になる表現は、あなたのうちにキリストがなされる働きである：

カトリックの辞書：

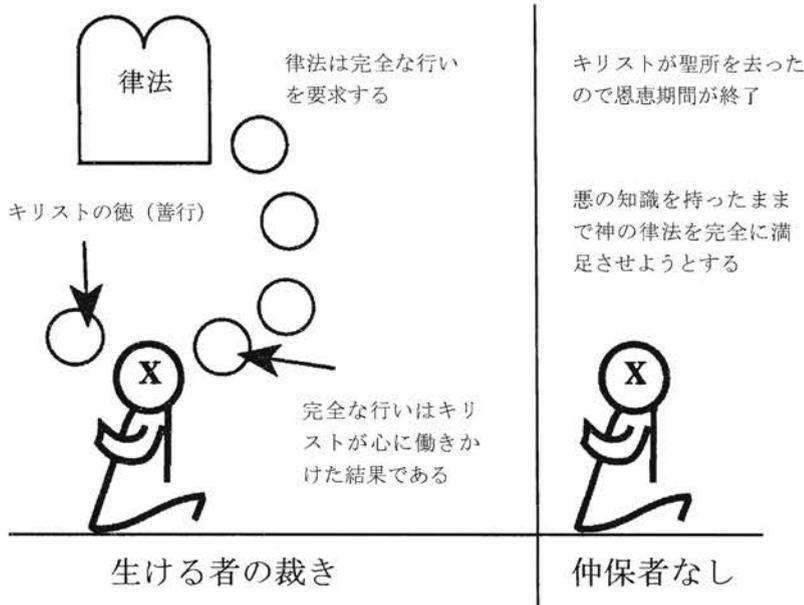
「神の律法を完全に満足させたと考えられない理由は何もない。この世の生涯の状態に限り」。

ユライヤ・スミス：

「ついに裁きのテストである律法の側に立つようになり、われわれは全くそれと調和して出るであろう」。

この二つの概念は、キリストは、裁きの前に律法を完全に満足させるために人間の内に地上で働かれるとする。もしそうなら、天の裁きの時にあなたの名前が呼ばれるときにキリストの仲保の働きを必要としない。なぜなら、地上の人間にキリストはその働きを完成されたとするからである。これは天の聖所においてキリストのあがなう血の必要を取り除くものである。キリストの力によってなされた人の業が彼を救うことになる。これこそ行いによる義であり、致命的な欺瞞である。

プランA： 仲保者がいなくなった悩みの時に
どのように神に受け入れられるのだろうか？



この説は、人が絶えず聖霊の導きに従っているなら、人は罪深い思い、行いを犯すことは意図的に止むと教える。キリストがその人の内に働くなら、完全な点まで来て、神の律法を完全に満足させる。この説は、悪の知識は神のみ前におけるあなたの道徳的立場には何の影響も与えない、だから、仲保者がいなくなる悩みの時に悪の知識があっても神に受け入れられると教えることになる。あなたは救われるか、どのように救われるかを決定するのは裁きである。この説によると、悩みの時の直前に来る裁きにおいて、仲保者がいなくなっていかなる欠点のためにも執り成す方がいないときに神の律法を完全に満足させるために、神の律法を完全に満足させるほどになっていなければならないと結論づけなければならない。これは次のように表現する：

カトリックの辞書：

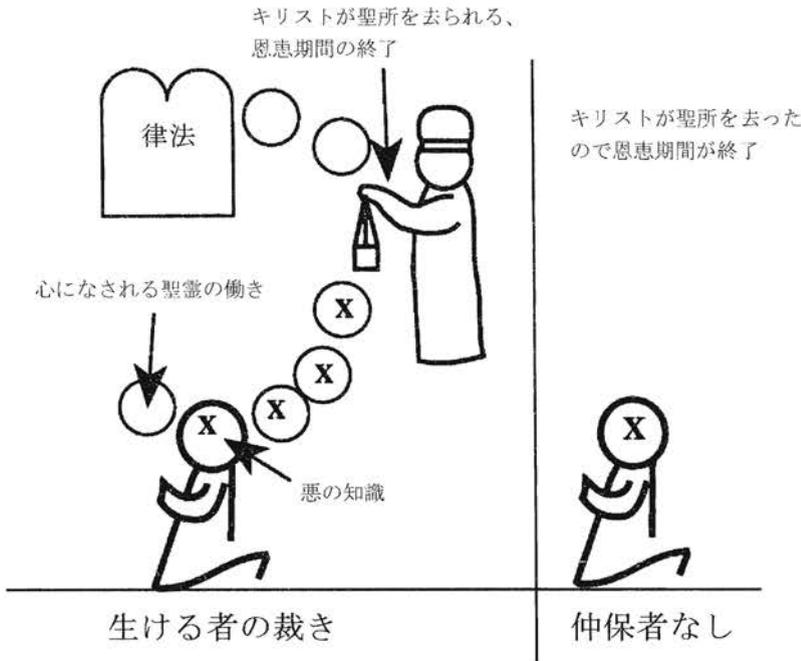
「神の律法を完全に満足させたと考えられない理由は何もない。この世の生涯の状態に限り」。

ユライヤ・スミス：

「ついに裁きのテストである律法の側に立つようになり、われわれは全くそれと調和して出るであろう」。

この説はカトリックの功績の教えであり、致命的な欺瞞である。

プランB： 仲保者がいなくなった悩みの時に
どのように神に受け入れられるのだろうか？



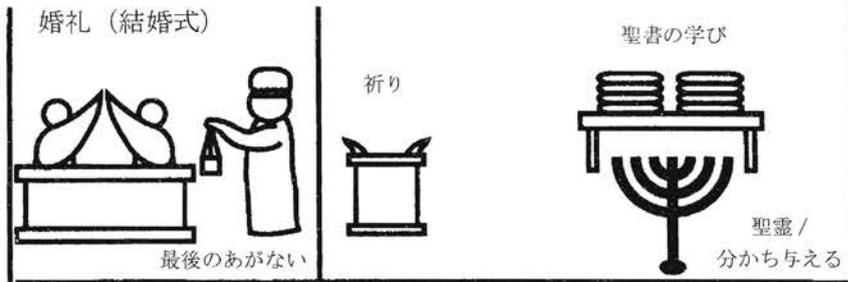
この考えはアドベンチストは仲保者なくして生きるという考えを誤解してきたという。人は悩みの時に仲保者が必要であるとする。キリストは人間の身代わりであるから、キリストを一度受け入れているのだから、彼が何をしようと関係なく救われる。さらにもっと強くいう人は、われわれは罪に勝利しなければならないという。たといそうであったとしても、どちらとも人は欠点を持っている。なぜなら、彼は悪の知識をもっており、身代わりであるキリストに頼って義であるはずである。悪の知識を持っている限り仲保者を必要とする。この説によると、悪の知識は再臨の時まで残っており、肉体が変えられる再臨の時に道徳的に完全とされるという。悪の知識は再臨の時まで残っているため、再臨の時まで仲保者を必要とする。この説は信仰によってのみ義認される正しい教理を持っている。しかし、聖所の清めとか、仲保者なくして生きるという歴史的アドベンチストの教理に問題を生じさせる。

プランC： 仲保者がいなくなる悩みの時に神に受け入れられるか？

次の章では婚礼（結婚式）に行くことによるのみ理解されうるという第3番目の考え方を紹介したい。そのために結婚式に行くということはどういうことなのかをまず理解しなければならない。結婚式行くことの意味を学ぶ時に、それが完全をもたらすが、それでいて我々の功績によって救われるのではないことを発見するであろう。また同時に仲保者なくして悩みの時をどのように生きるかを知ろう。

さあ、婚礼（結婚式）に来たれ！

マタイに提示されている聖所の清め



年毎の礼拝の奉仕

日毎の礼拝の奉仕

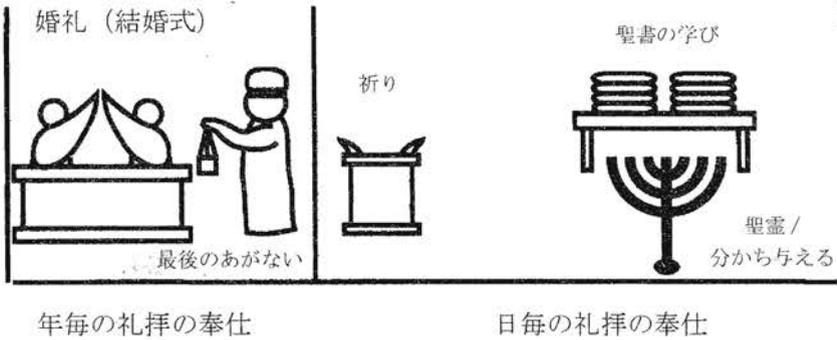
「1844年の夏の『さあ、花婿だ』という宣言は、多くの者に、主の再臨はすぐだと期待させた。その指定された時に、花婿は、人々が期待したように地上ではなくて、婚宴のために、すなわちみ国を受けるために、天の日の老いたる者のもとに来たのである。『用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやにはいり、そして戸がしめられた。』彼らは、婚宴の席に列することはできなかった。なぜなら、これは天において起こり、彼らは地上にいるからである。キリストの弟子

たちは、『主人が婚宴から帰って』くるのを『待って』いなければならない（ルカ12：36）・・・これらの人々は、天の聖所に関する真理と、救い主の務めの変化とを認め、信仰によって、天の聖所における彼の働きに従っていった。そして、聖書のあかしをとおして同じ真理を受けいれ、キリストが仲保の最後の働きを行なうために、そしてその最後にはみ国を受けるために、神の前に出られるのに信仰によって従っていく者たちは、すべて、婚宴のへやにはいるものとして表わされているのである」（大争闘下 143. 145）。



キリストの最後の仲保の働きを理解し、受け入れることによってわれわれは結婚式に行くのであるということを知るであろう。その事をよく理解するためには結婚式と最後のあがないの関係を理解する必要がある。

あがないの日に何が起こったのであろうか？ レビ記16章にあがないの日のことが詳しく記されている。



レビ 16：20 「こうして聖所と会見の幕屋と祭壇とのために、あがないをなし終えたとき、かの生きているやぎを引いてこなければならぬ」。

レビ 16：29.30 「これはあなたがたが永久に守るべき定めである。すなわち、七月になって、その月の十日に、あなたがたは身を悩まし、何の仕事もしてはならない。この国に生まれた者も、あなたがたのうちに宿っている寄留者も、そうしなければならない。この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」。

あがないの日に聖所は清められた。上の聖句は民が清められることをはっきり述べている。「この日にあなた方はすべての罪から清められる」と。20節はアロンは聖所のためにあがないを完了すると言っている。彼らはすべての罪から清められるというのである。結婚式に行くということはこの最後の仲保の働きを理解することであるなら、この結婚式とあがないの日はどんな関係があるのだろうか？

聖書にあがない ATONEMENT は次のように描写されている。

エペソ 5:23 「キリストが教会のかしらであって、自らは、からだなる教会の救主であられるように、夫は妻のかしらである」。

エペソ 5:25-27 「夫たる者よ、キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい。キリストがそうなさったのは、水で洗うことにより、言葉によって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである」。



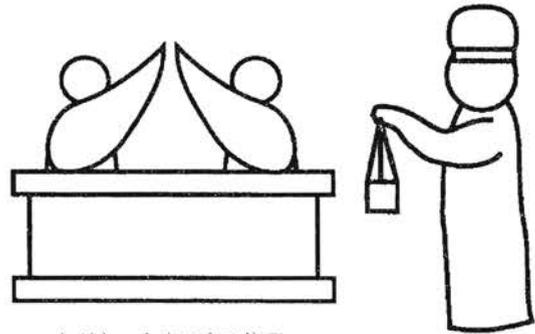
エペソ 5:30-32 「わたしたちは、キリストのからだの肢体なのである。『それゆえに、人は父母を離れてその妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである』。この奥義は大きい。それは、キリストと教会とをさしている」。

上の聖句によると結婚式において二人の人は「一体」「一つの肉（英文）」となると描写され、キリストとご自分の民に例えられている。

「婚姻は、人性と神性との結合を表わし」（実物教訓 287）。

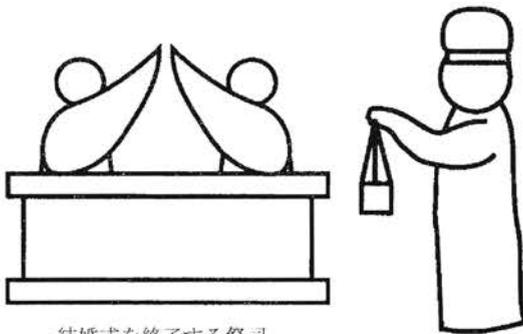
二人の人が一つになるということは ATONEMENT あるいは AT-ONE-MENT（合体する）を意味する。故に、あがない ATONEMENT の日は、結婚式のことを意味する。また聖句によると、この結婚式においてキリストは水で洗うことにより、言葉によってご自分の教会を清めてくださると言っている。聖所の清めもまた清めを含んでいる。結婚式は教会から罪を引き離し、キリストとご自分の民が一つになる AT-ONE-MENT の過程である。

レビ 16:20 「こうして聖所と会見の幕屋と祭壇とのために、あがないをなし終えたとき、かの生きているやぎを引いてこなければならぬ」。



あがないを完了する祭司。
これは最後のあがないという。

もし、あがないの日が結婚式の日であるなら、あがないの完了は結婚の完了である。もし、結婚が人性と神性の結合であるなら、その人性と神性の結合はキリストが至聖所におられるときに完了する。あがないが完了してキリストは聖所を出られると罪を処理する執り成し者はもはやいなくなる。故に、結婚式と呼ばれる清めの働きはキリストが聖所を去られる前に完了しなければならない。



結婚式を終了する祭司。
これは最後のあがないと同じ。

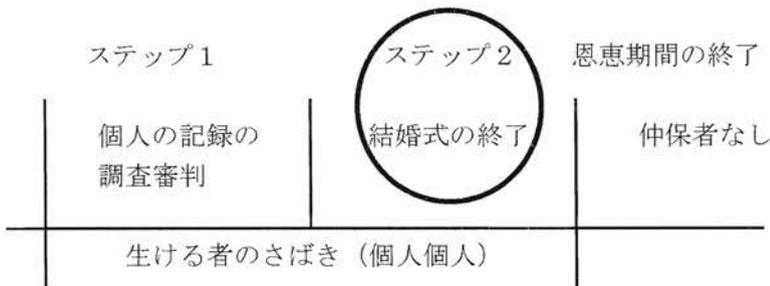
「イエスが聖所で奉仕しておられた間に、審判は死せる義人から次に生ける義人へと続けられていたのである。キリストは、ご自身の民のために贖いをなして彼らの罪を消し去り、み国を受けておられた。み国の民はもうできあがっていた。小羊なるキリストの婚姻は終わった」(初代文集 452)。

注目！ 小羊の結婚式は終わったのである。完了したのである！ 罪の除去、すなわち最後のあがないは結婚式に例えられている。つまり、それらは一つのことであり、同じ事件なのである！

マタイ 22 章を観察してみよう：

マタイ 22:9-11 『だから、町の大通りに出て行って、出会った人は誰でも婚宴に連れてきなさい』。そこで、僕たちは道に出て行って、出会う人は、悪人でも善人でもみな集めてきたので、婚宴の席は客でいっぱいになった。王は客を迎えようとして入ってきたが、そこに礼服をつけていないひとりの人を見て。

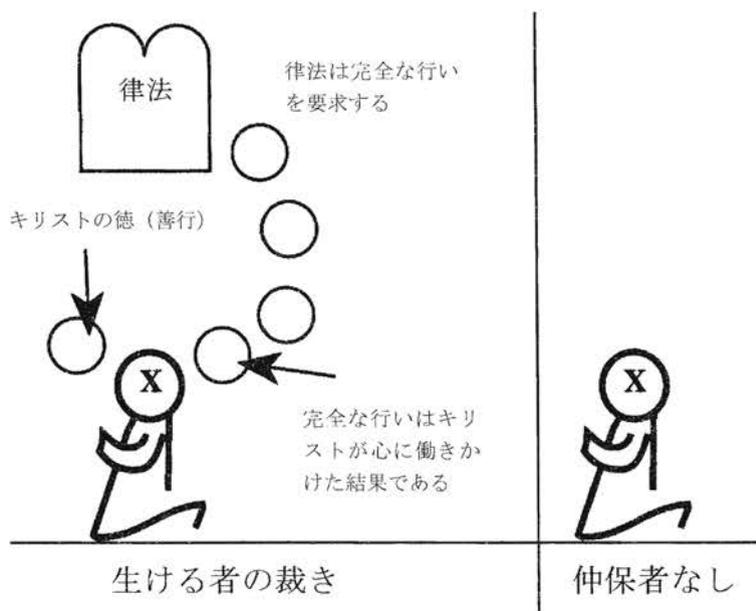
天国は結婚式に例えられている。結婚式の前にさばきが来る。11 節に描写されている。結婚式が行われる前に王は客を調べるのである。



「マタイによる福音書 22 章のたとえにおいて、同じ婚宴の象徴が用いられ、婚宴に先だって調査審判が行なわれることが明示されている。婚宴に先だって、王は、すべての客が、礼服、すなわち、小羊の血で洗って白くしたしみのない品性の衣を着ているかを見るために入ってくる。・・・品性を調査し、だれが神の国に入る準備をしたかを決定するこの働きが、調査審判の働きであり、天の聖所における最後の働きなのである」(大争闘下 145)。

結婚式はさばきにおいて個人の名前が挙げられてから後に来る。つまり、その人の名が挙げられた後に結婚式は完了するのである。

なぜさばかれた後に結婚式は完了するのであろうか？ この質問を理解することは結婚式に出席することの重要性を理解するうえで非常に重要である。



小さい説明: このイラストの人はさばきの時に彼の代わりにキリストが立つことを必要としない。なぜなら、彼の内になされたキリストの働きは彼の業を既に完全にしたからである。

カトリックの業(行い)に関する教理はあなたの内になされるキリストの働きは、神の律法を完全に満足させると述べている。さばきというのは彼らは完全かどうかと品性を調べる時なのである。さばきの時には何も更に良くされることはない。その時はどうして救われるかについて彼の信じていることが調べられるだけである。もし、さばきの時には品性は完全であると考えているなら、彼はさばきの前にキリストの働きが彼の内に完成していることによって救われるとするので、彼の執り成し者としてキリストを必要としないことになる。あなたの内になされるキリストの働きによって救われるとするなら、それは自分自身の業で救われるとするカトリックの行いによる救いの教理である。

初代文集 452によると聖所におけるキリストの仲保の働きの中に結婚式は完了する。



なぜこの事を理解することが重要なのだろうか？ われわれが結婚式、すなわち人性と神性の結合はさばきの時に名前が呼ばれて後に完了するという理解だと、さばきの時のわれわれの業は完成しているのではないし、神の律法を完全に満足させることはできない。そう理解すると、天の聖所のキリストの身代わりの義に我々は依存するのであり、われわれの行いに頼ることは一切できないことになる。この時にわれわれの業に目を向けることは致命的な欺瞞となる。しかし、われわれはさばきの時に名前が呼ばれる前に罪に勝利していなければならない。

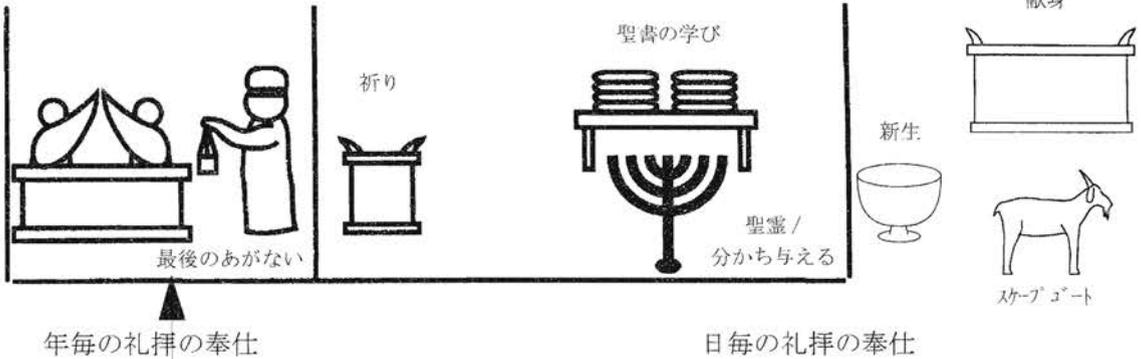
ダニエルに提示されている聖所の清め

ダニエル 8：14 「彼は言った、『二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する』」。

至聖所における働きは
神の民を完全にするのに
必要なステップを表す

聖所の器具は
聖化における
ステップを表す

外庭でなされることは
信仰による義認の
ステップを表す

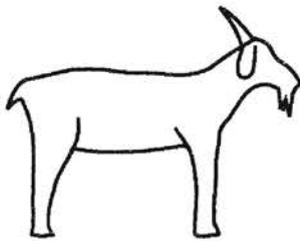


2300日は1844年に終わる。その時に聖所の清めが始まった。死んだ義人から始まり間もなく生きた義人に移る。われわれは生ける義人のさばきが始まるべき時に住んでいるので、生ける者のさばきの時に何が起きるかに焦点を当てることが重要である。

レビ16章はヘブル人の時代の聖所の清めについて詳細に描写している。故に、レビ記16章は実体のさばきの日に、すなわち各々の名前が呼ばれるあがないの日に天で何かなされるかという大事な教課である。

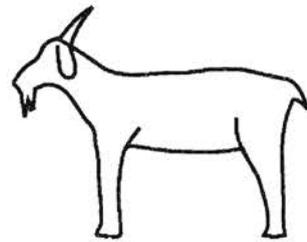
レビ記16章のレッスン

レビ 16:7-8 「アロンはまた二頭のやぎを取り、それを会見の幕屋の入り口で主の前に立たせ、その二頭のやぎのために、くじを引かなければならない。すなわち一つのくじは主のため、一つのくじはアザゼルのためである」。



スケープゴート
(罪を負って荒野に追いやられる山羊)
サタンを表す

あがないの日に罪祭としてあがないをするために、祭司と民のためにいくつかの動物が捧げられた。



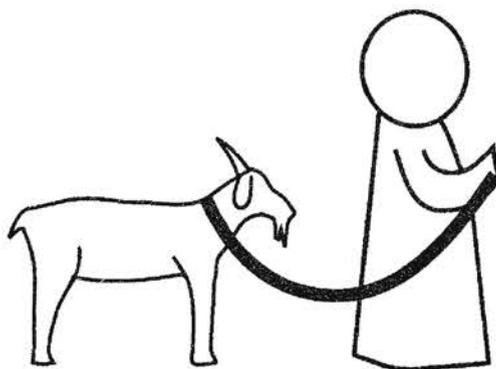
罪祭

レビ 16:20-22 「こうして聖所と会見の幕屋と祭壇とのために、あがないをなし終えたとき、かの生きているやぎを引いてこなければならぬ。そしてアロンは、その生きているやぎの頭に両手をおき、イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろのものが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白して、これをやぎの頭にのせ、定めておいた人の手によって、これを荒野に送らなければならない。こうしてやぎは彼らのもろもろの悪をになって、人里離れた地に行くであろう。すなわち、そのやぎを荒野に送らなければならない」。

上の聖句は昔、あがないの日に何がなされたかを描いている。これはわれわれの名前が呼ばれる実体の、生ける者のさばきのときに何が起こるかを教えている。

下の靈感の書の説明で、民の罪は年間を通して聖所に移され、あがないの日に聖所は清められることに注意してほしい。この清めは罪の除去と呼ばれ聖所から取り出され、山羊にその罪が移され、その山羊が荒野に送り出されるのである。

「古代において、民の罪が、信仰によって罪祭の上におかれ、そしてその血によって、象徴的に地上の聖所に移されたように、新しい契約においては、悔い改めた者の罪は、信仰によってキリストの上におかれ、そして実際に天の聖所に移されるのである。そして、地上の聖所の型としての清めが、それを汚してきた罪を取り除くことによって成し遂げられたように、天の聖所の実際の清めも、そこ



に記録されている罪を取り除くことによって、すなわち消し去ることによって、成し遂げられなければならない。しかし、これを完成するためには、だれが罪の悔い改めとキリストを信じる信仰によって、贖いの恵みを受ける資格があるかを決定するために、記録の書の調査がなされねばならない。したがって、聖所の清めには、調査の働き、すなわち審判の働きが含まれるのである。この働きは、キリストがご自分の民を贖うために来られる前に行われねばならない。なぜなら、彼が来られる時には、彼はすべての者に、それぞれの行為に応じて報いを与えられるからである（黙示録 22 : 12 参照）」（大争闘下 136）。

「天の実際の清めも、そこに記録されている罪を取り除くことによって、すなわち消し去ることによって、成し遂げられねばならない」に注意を向けていただきたい。しかし、聖所が清められる前に記録の書の調査がある。故に、聖所の清めには二つの部分がある。

ステップ1	ステップ2	恩恵期間の終了
個人の記録の調査審判	罪の除去	仲保者なし
生ける者のさばき（個人個人）		

次の文も聖所の清めに二つの部分があることを明瞭にしている。

「大いなる最後の報いの日に、死者は、「そのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれ」る（黙示録二〇ノ一）。このとき、真に悔い改めたすべての者の罪は、キリストの贖罪の血によって、天の書物から消される。こうして、聖所から罪の記録が除かれ、きよめられるのである。象徴においては、この大いなる贖罪のみわざ、つまり、罪を消し去ることは、贖罪の血によってなしとげられた。真に悔い改めた者の罪が、ついに贖われて、天の記録から消されて、もはや思い出すことも心に浮かぶこともなくなるように、象徴では罪は荒野に追いやられ、会衆から永遠に切り離された」（人類のあけぼの上 422. 423）。

ステップ1	ステップ2	恩恵期間の終了
個人の記録の 調査審判	罪の除去 最後のあがない 罪を思い出さない	仲保者なし

生ける者のさばき（個人個人）

個人の記録の調査は実際の聖所の清めの前になされる。実際の罪の除去、清めは最後のあがないとも呼ばれ、罪の記憶も取り除かれるというのである。それは山羊の頭に罪が移されて、荒野に送り出されることによって象徴されている。前の学びでわれわれは結婚式は調査審判の後に起きる出来事であるということを知った。結婚式と最後のあがないは同じ時に起こることである。

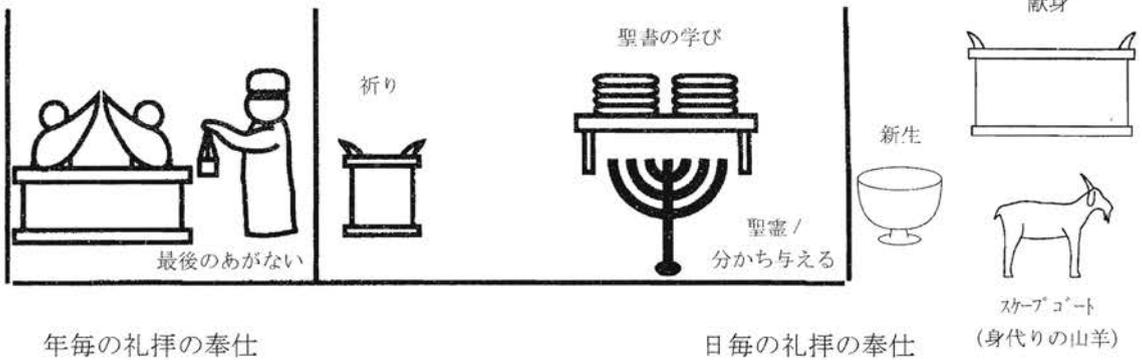
年毎の奉仕であがないは終わった。

レビ 16:20 「こうして聖所と会見の幕屋と祭壇とのために、あがないをなし終えたとき、かの生きているやぎを引いてこなければならない」。

至聖所における働きは
神の民を完全にするのに
必要なステップを表す

聖所の器具は
聖化における
ステップを表す

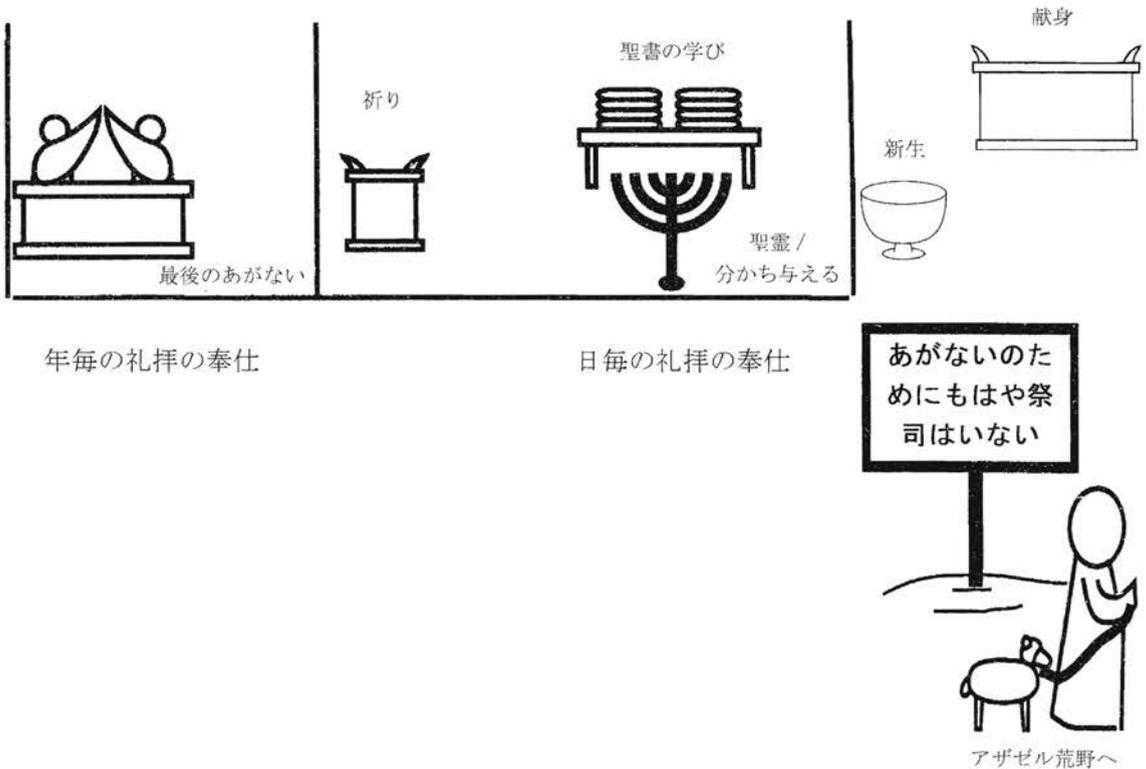
外庭でなされることは
信仰による義認の
ステップを表す



祭司はあがないをなし終えたという表現に注目していただきたい。最後のあがないを終えたという意味である。もやは執り成し者としての祭司はいないのである。故に罪人は聖所に来て罪の許しを乞うことはできない。罪人の許しを請う祈りを負ってくださる方が聖所におられないからである。

仲保者なしに生きる

「天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない」(大争闘下 140)。



この時罪の告白のいけにえを持ってくるのは遅すぎるのである。覚えていただきたい。われわれは我々の服従のためにさえ仲保者が必要であったのである。

神の民は全生涯にわたって仲保者を必要とした。今われわれはあがないの日に来て最後の贖いがなされ、仲保者はもはやいなくなるという。仲保者なくして生きるということを理解するためには、われわれは人間が仲保者を必要とするようになった初めのときに戻って、何が仲保者を必要とさせたかを理解しなければならない。善悪の知識の木の実を食べることによって人間は悪の知識（人類のあけぼの上48、教育17参照）を得た。そこからあがないの働きが始まった。そこになぜ人間は絶えざる執り成しが必要になったかの理由がある。

創世記 2:17 「しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それをとって食べると、きっと死ぬであろう」。

創世記 3:5 「それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。

人間のためのあがないはこの実を食べて
悪の知識を得た結果始まったのである。

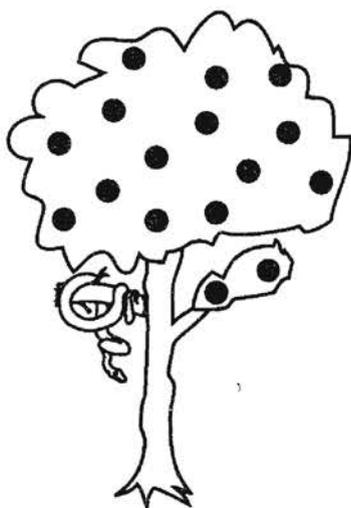
罪の前

仲保者なし

人の心の中に善の知識だけ



罪なき人間



善悪の知識の木

罪の後

仲保者必要

悪の知識



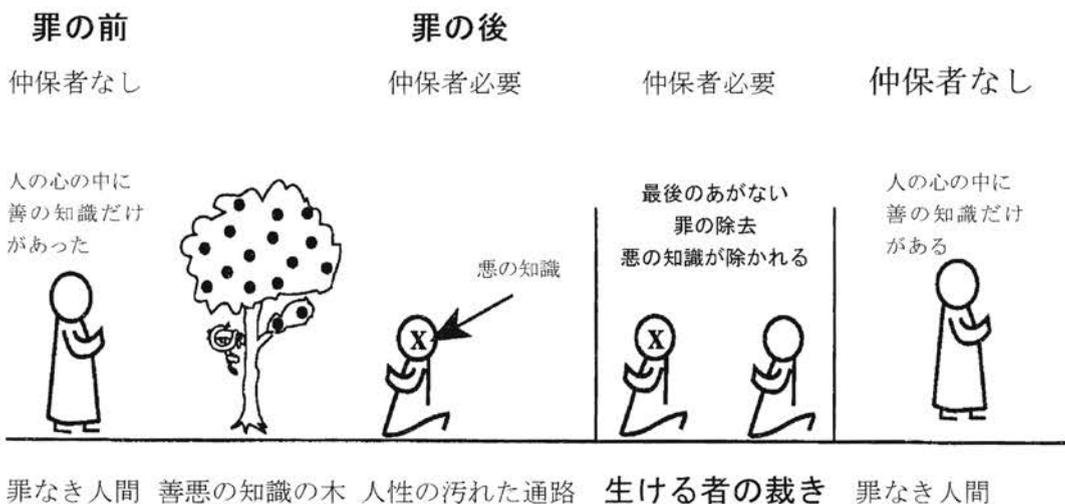
人性の汚れた通路

もし悪の知識があがないと執り成しを必要とさせたなら、では、最後のあがないは、悪の、あるいは罪の知識を取り除く必要があるのではないだろうか？ そうでなければ結局執り成しが必要ということになる。

「真に悔い改めた者の罪が、ついに贖われて、天の記録から消されて、もはや思い出すことも心に浮かぶこともなくなるように、象徴では罪は荒野に追いやられ、会衆から永遠に切り離された」(人類のあげぼの上 422.423)。

「義人たちは解放のために熱心な叫びを止めるのではない。彼らはいかなる特定の罪をも思い出すことはできないが、彼らの全生涯にほとんど良きことを見ることができない。彼らの罪は裁きに先立っていき、許しが書き記されている。彼らの罪は忘却の地に運び去られ、そして、彼らはそれらを思い出すことができない」(3 S G 135)。

罪を思い出すことはできないということは、別な言い方をすれば、罪の知識を持たないということである。もし罪が忘却の地に運び去られるなら、悪の知識は心から取り除かれるのである。悪の知識が執り成し者を必要とさせたのである。悪の知識を取り除くことが仲保者なくして生きるために必要とされるのである。

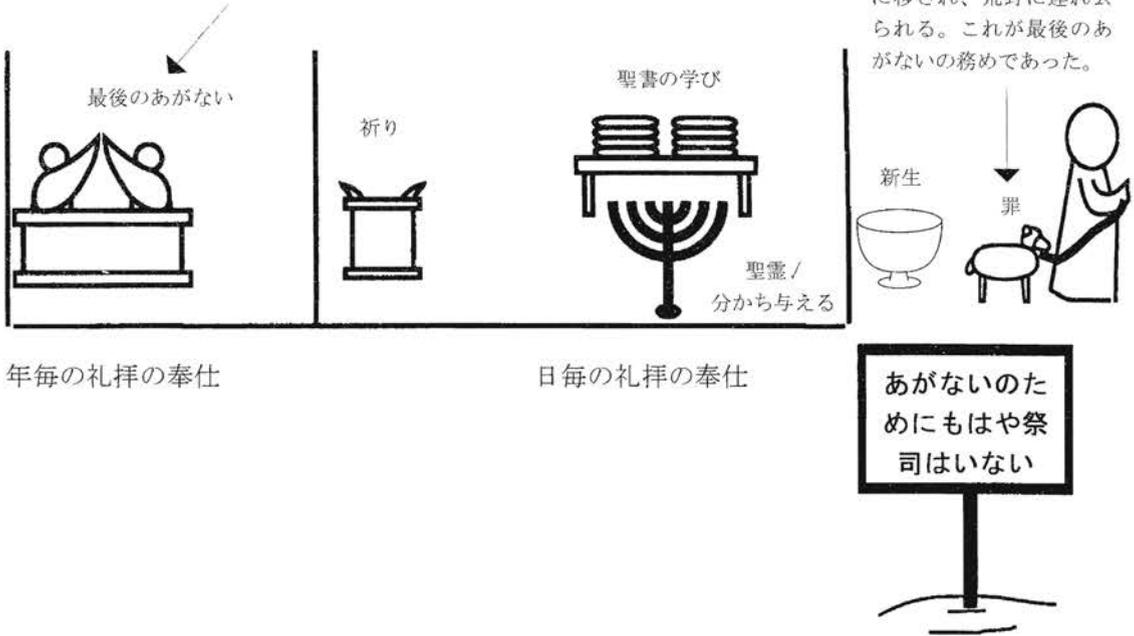


更にヘブル書から：

ヘブル 10：16-18 『わたしが、それらの日の後、彼らに対して立てようとする契約はこれであると、主が言われる。わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう』と言い、さらに、『もはや、彼らの罪と彼らの不法とを、思い出すことはしない』と述べている。これらのことに対するゆるしがある以上、罪のためのささげ物は、もはやあり得ない」。

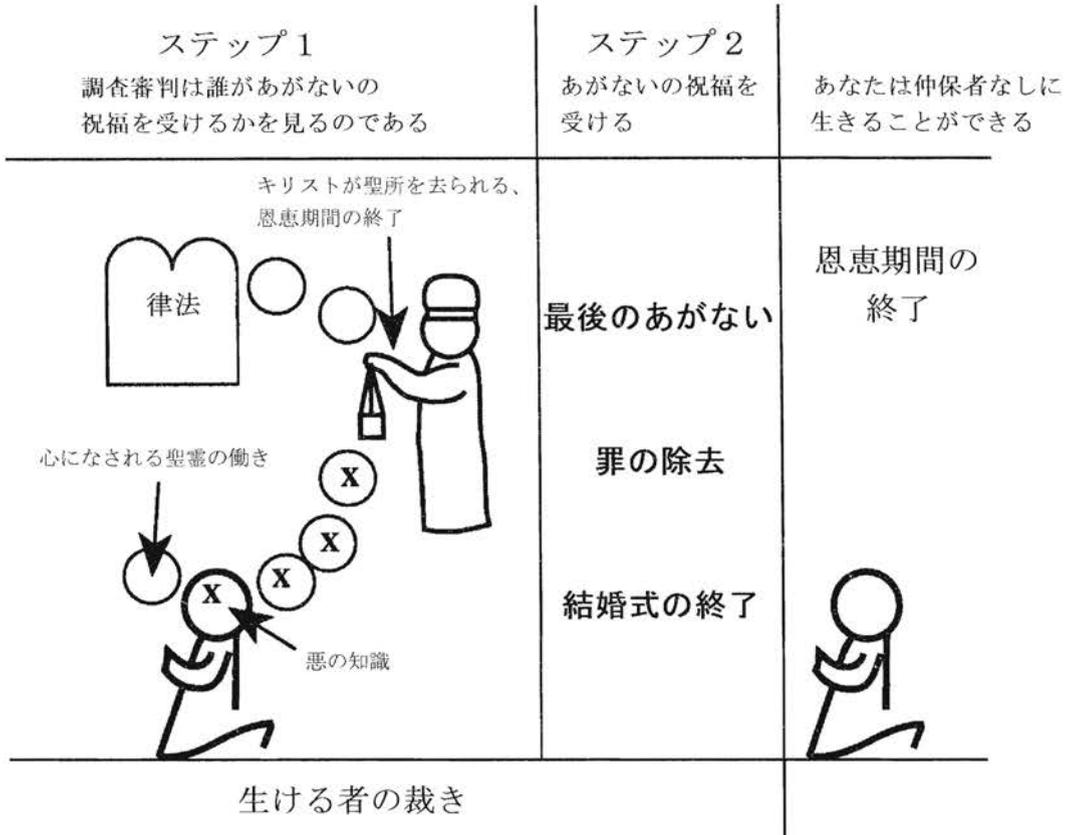
あがないの日に最後のあがないがなされた。「最後の」というのは、それ以降はあがないがないことを意味する。罪のための供え物はもはやない。

民の告白された罪は山羊に移され、荒野に連れ去られる。これが最後のあがないの務めであった。



ヘブル書の聖句は、キリストが彼らの罪を思い出さない、そしてもはや罪のためのいけにえはないということを告げている。最後のあがないということはあがないの集結であり、もう罪のための捧げ物はないのである。つまり、いけにえが止むその時の前に罪は思い出さなくなるような最後のあがないがなされるのである。神が人の罪を思い出さなければ、その人も罪を思い出さないのである。罪を思い出さないということは罪が許されることと同じで、悪の知識が取り除かれることである。

あなたの名前がさばきで呼ばれるとき、この事が起こるのである。



賢い乙女たちが結婚式に行く方法は、至聖所におけるキリストの働きを理解することによってである。われわれは結婚式、あるいは最後のあがないは、各々の名前が呼ばれて裁かれた後のことだということを学んだばかりである。この理解こそわれわれが自分の業に頼ることから守られるアンカー（錨）である。なぜなら、たといわれわれが罪に勝利していても、裁きで名前が呼ばれるとき、なおもわれわれは汚れた通路である。なおも仲保者を必要とする。裁きの時にはカトリック教理が教えているように神の律法を完全に満足させる状態ではない。最後のあがないの時に悪の知識が取り除かれると理解することは、仲保者なくしてわれわれはいかに生きることができるかという理解を助けてくれる。しかし、すべての悪い言葉、行為に勝利することは裁きに先立ってなされなければならない。それは日毎の奉仕に例証されている。しかし、罪に対する勝利は信者を完全にはしない。

「預言者は語っている。「その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる」(マラキ書3：2、3)。天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上にすんでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行われ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行われなければならない。この働きは、黙示録14章の使命の中にさらに明瞭に示されている」(大争闘下 140)。

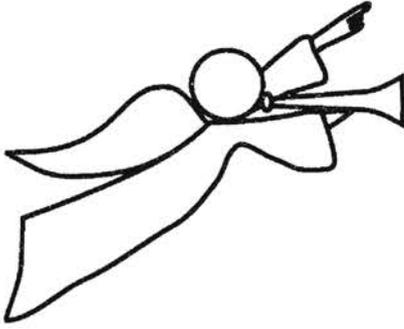
上述の経験はあがないの日の清めを説明している。清められた結果に注意していただきたい。「彼らは義をもって、捧げ物を主にささげる」のである。「その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように(人類が罪を犯す前に)、また先の年のように主に喜ばれる(マラキ3：4)」。悪の知識が取り除かれる前は、人は、すべてそのなすところは汚れていたために、身代わりのいけにえによってのみ受け入れられたのである。最後のあがないの結果、神は悪の知識を取り除くことによって聖徒達の品性を罪なきものとされたのである。つまり、いまや聖徒達の品性は罪がないので、彼らは神の前に義をもって捧げ物ができ、受け入れられるのである。最後のあがないの後には彼の代わりに立つ身代わりはもういないのである。

「イエスの執り成しが終わった後の、恐ろしい時に、聖徒たちは、仲保者なしで、聖なる神の御目の前に生きていた」(初代文集 453)。

「キリストに対する信仰によって神の戒めのすべてに従う者だけが、アダムが罪を犯す前に生きた罪のない状態に到達するであろう。彼らは、神の律法のすべてに従うことによってキリストに対する愛を証するのである」(6 B C 1118)。

罪深いということは彼の内に悪の知識があることを意味する。罪なき状態は悪の知識が取り除かれる結果である。その時はじめて人間はアダムが善悪の知識の木の実を食べる以前のアダムの状態になる。墮落した肉体は再臨の時に回復されるのである。

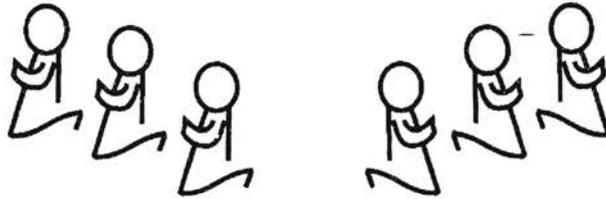
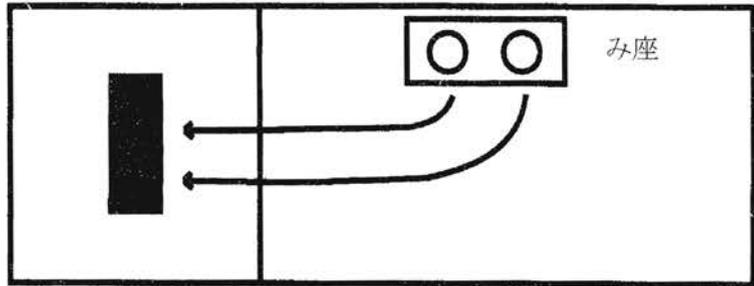
ヨエルに提示された聖所の清め



ヨエル 2:15-17 「シオンでラッパを吹きな
らせ。断食を聖別し、聖会を召集し、民を集
め、会衆を聖別し、老人たちを集め、幼な子、
乳のみ子を集め、花婿をその家から呼びだし、
花嫁をそのへやから呼びだせ。主に仕える祭
司たちは、廊と祭壇との間で泣いて言え、『主
よ、あなたの民をゆるし、あなたの嗣業をも
ろもろの国民のうちに、そしりと笑い草にさ
せないでください。どうしてもろもろの国民
に、「彼らの神はどこにいるか」と言わせてよ
いでしょうか』。

ラッパの祭りはあがないの日の直前に来た。ラッパは人々を聖所の周りに集め
るために吹かれたのであった。最後のあがないがなされる時、あがないの日はさ
ばきの日でもあった。それは婚礼（結婚式）とも呼ばれたのである。今日は至聖
所で行われていることを理解することによってそこに入るのである。第1章で二
つのグループがいたこ

とを思い出していただ
きたい。両方のグルー
プとも聖霊を祈り求め
ていた。しかし、至聖所
のキリストに従って
いった者のみが、聖霊
を受けたのである。



ヨエル2:23 「シオンの子らよ、あなたがたの神、主によって喜び楽しみ、主は
あなたがたを義とするために秋の雨を賜い、またあなたがたのために豊かに雨を降
らせ、前のように、秋の雨と春の雨とを降らせられる」。

この聖句によると、のラッパの音に応答して聖所に集まった者が聖霊を受ける
のである。

ゼカリヤ 10：1「あなたがたは春の雨の時に、雨を主に請い求めよ。主はいなずまを造り、大雨を人々に賜い、野の青草をおのおのに賜わる」。

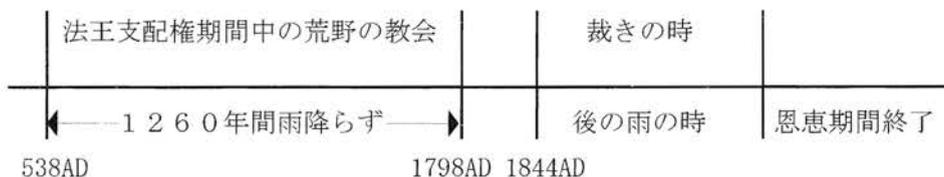
後の雨の時がある。その時に雨を求めるように命じられている。神の民はそれがいつの時なのかを知って後の雨のために熱心に祈らなければならない。

黙示録 11：3「そしてわたしは、わたしのふたりの証人に、荒布を着て、千二百六十日のあいだ預言することを許そう」。

黙示録 11：6「預言をしている期間、彼らは、天を閉じて雨を降らせないようにする力を持っている。さらにまた、水を血に変え、何度でも思うままに、あらゆる災害で地を打つ力を持っている」。

この聖句によると、1260年の間は雨は降らないことを言っている。1260年間は538年から1798年までの法王権が支配していた期間である。

黙示録 12：6「女は荒野へ逃げて行った。そこには、彼女が千二百六十日のあいだ養われるように、神の用意された場所があった」。



もし、法王権支配期間の1260年の間、教会は雨を受けなかったなら、教会は荒野にいたはずである。それは雨の降る時期はその時の後ということになる。1260日の法王権支配期間の後に聖霊は注がれるはずであった。

次の聖句は後の雨の降る時期について記している。

使徒行伝 3：19, 20 「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである」。

慰めの時というのは後の雨のことである。

「福音の大いなる働きは、その開始を示した神の力のあらわれより劣るもので終わることはない。福音の開始にあたって秋の雨（前の雨）となって成就した預言は、その終局において、春の雨（後の雨）となって再び成就するのである。これが、使徒ペテロが待望した『慰め〔原文ではrefreshing（活気づけ、回復の意）〕の時』である。彼は次のように言った。『だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時がきて、・・・イエスを、神がつかわして下さるためである』（使徒行伝 3：19, 20）」（大争闘下 382）。

「調査審判と罪をぬぐい去る働きは、主の再臨の前に完了しなければならない。死者は、書物に記録されたことによって裁かれるのであるから、彼らが調査されるその審判が終わるまでは、彼らの罪はぬぐい去られることはできない。しかし、使徒ペテロは、はっきりと、信者の罪は、『主のみ前から慰め〔原文ではrefreshing（活気づけ、回復の意）〕の時が』くるときにぬぐい去られる。そして、『「キリストなるイエスを、神がつかわして下さる』』と言っている（使徒行伝 3：19 参照。同 20 節）。調査審判が終わると、キリストは来られる。そして、たずさえて来た報いを、それぞれの人の行いにしたがってお与えになるのである」（大争闘下 218）。

個人のさばきには何が含まれるか、そのステップ

ステップ 1	ステップ 2		
調査審判	罪の除去は 後の雨が降る時 最後のあがない 婚礼の完了	後の雨の力で 大いなる叫びの メッセージ	恩恵期間の終了

もし「慰めの時が来て」、罪が除去されるなら、後の雨は罪の除去の時とすることができる。しかし、先の学びで罪の除去は、裁きの時にあなたの名前が呼ばれて後に来ることを思い出していただきたい。それに罪の除去は最後のあがないであり、結婚式の完了であるとも言われている。

前に学んだように、人性と神性の結合は結婚式の時に完了する。罪の除去、最後のあがないは同じ事件である。つまり、この時神の民は完成されるのである。

個人のさばきには何が含まれるか、そのステップ

ステップ 1	ステップ 2		
調査審判	罪の除去 後の雨が降る時 最後のあがない 婚礼の完了	後の雨の力で 大いなる叫びの メッセージ	恩恵期間の終了

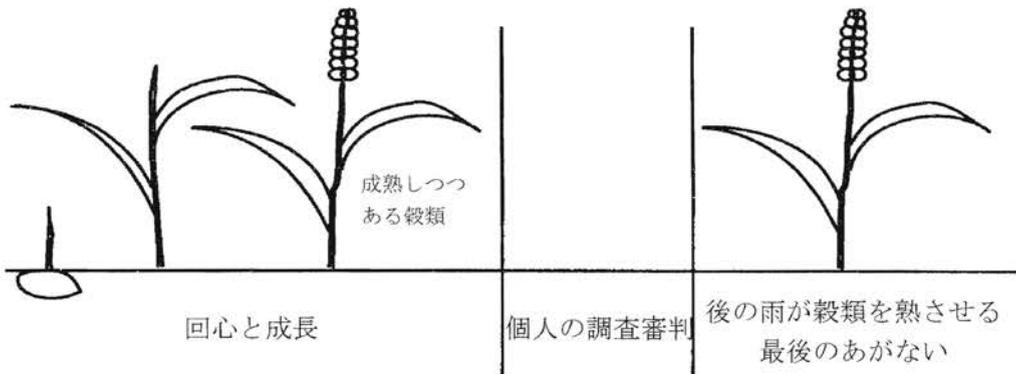
では、もしわれわれの論法が正しいなら、後の雨は最後のあがないの時に、結婚式の時に来ることになる。その時後の雨がわれわれの内に同じ働きを完成するのである。つまり、後の雨はわれわれの内に品性を完成するのである。後の雨がわれわれを完成し仲保者なくして生きるようにさせるのである。次の引用文を理解するために、恵みという言葉を見てみよう。

「キリストから学ぶということは、彼の恵み、つまり彼の品性を受けることを意味する」(実物教訓 247)。

キリストの品性は恵みという言葉と入れ替えることができる。次の引用文を読むときにこの定義を覚えて頂きたい。

次の引用文は後の雨は信者の内に恵み（品性）の働きを完成することを明確にしている。

『あなたがたは春の雨（後の雨＝欽定訳）の時に、雨を主に請い求めよ。主は稲妻を作り、大雨を人々に賜い』『あなたがたのために豊かに雨を降らせ、前にように秋の雨（先の雨＝欽定訳）と春の雨（後の雨＝欽定訳）とを降らせられる』中東では種まきの時に先の雨が降る。それは種の発芽のために必要である。豊かにする雨のおかげで柔らかい芽が成長する。季節が終わりに近づいて降る後の雨は、穀物を熟させ、収穫に備えさせる。主はこれらの自然の営みを用いて、聖霊の働きを象徴なさった。最初に露や雨が種に発芽させ、それから収穫物を熟させるように、聖霊もある段階から次の段階へと前進させるために与えられる、霊的成長の過程である。穀物の成熟は、魂のうちに神の恵みの働きが完成する様を象徴している。聖霊の力により、品性において神の道徳のみ像が完成される。われわれはキリストのみ像に完全に換えられるのである』（TM 506）。



下線を引いた部分を特に気をつけていただきたい。後の雨は穀類を熟させる。熟するということは、魂の中に神の恵み（品性）の働きが完成することを表している。故に、魂の中に神の恵みの働きを完成するのは後の雨である。使徒行伝 3：19 と各時代の 大争闘下 2 1 8 は、後の雨が降る時に罪が除去されると言っている。これは後の雨の時を罪の除去と最後のあがないの時と同時においている。最後のあがないも神の恵みの業の完成として同じ考えを伝えている。

「先の雨の祝福を楽しみながらも、一方われわれは後の雨なしには穂を満たし、穀物を熟させ、収穫に備えることもできない。またそれなしには、種蒔く者の働きがむだになるという事実を見失ってはならない。神の恵みは初めのときにも成長のすべての段階でも必要であり、神の恵みだけが働きを完成するのである」（TM 507, 508）。

後の雨が神の恵み、または品性の働きを完成することは次の引用文にも見られる。

「地上の収穫物を実らせる後の雨は、教会を人の子の来臨に備えさせる霊的恵みを象徴している。しかし、先の雨が降っていなければ、生命はなく、緑の葉は出てこないのである。先の雨がその働きをしていなければ、後の雨は種を完成させることはできない」(TM 506)。

「聖霊を神に求めるときに、それはわれわれのうちに働いて柔和、心の謙遜をもたらし、神への依存を自覚させ、完成する後の雨に備えさせる」(TM 509)。

個人のさばきには何が含まれるか、そのステップ

ステップ 1	ステップ 2		
調査審判	最後のあがない 後の雨は恵み（品性） の働きを完成する 仲保者なしに生きる ために備える	後の雨の力で 大いなる叫びの メッセージ	恩恵期間の終了 仲保者なし

はっきりと、後の雨が神の民を完成すると述べている。使徒行伝 3：19 は後の雨を罪の除去の時のおいている。罪の除去または最後のあがないは裁きの後にくる。つまり、神の民はあなたが裁かれて後に完全にされるのである。この事を理解することが、裁きの時に自分の業に頼ることから守るのである。裁きの時に、われわれが救われるのは、キリストがわれわれの内に成された働きによるのではなく、身代わりのキリストの義に全く頼ることによるのである。

先の研究で学んだことは、最後のあがないは、最後のあがないであってそれ以後は罪のためのあがないがないし、捧げ物もない。われわれは仲保者なしに生きるのである。もし、後の雨が最後のあがないと一緒に来るなら、それはわれわれの内に恵みの働きを完成し、仲保者なくして生きるように備えるものである。

「わたしは、また、悩みの時に、聖所に大祭司がおられないで神のみ前に生きるためにはどのような状態でなければならないかを悟っていない人が多くあるのを見た。生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのかたちを完全に繁栄していなければならない。

わたしは、多くの人々が、必要な準備をおろそかにしていながら、主の日に立ち得て神のみ前に生きるにふさわしいものとなるために、『慰めの時』と『春の雨』(後の雨)とを持っているのを見た。ああ、わたしは、なんと多くの人々が、悩みの時に、避け所がないのを見たことだろう。彼らは必要な準備を怠った。だから、彼らは、聖なる神の前に生きるのに適したものと彼らをするためにすべての者が持たなければならない慰めを、受けることができなかった」(初代文集 149)。

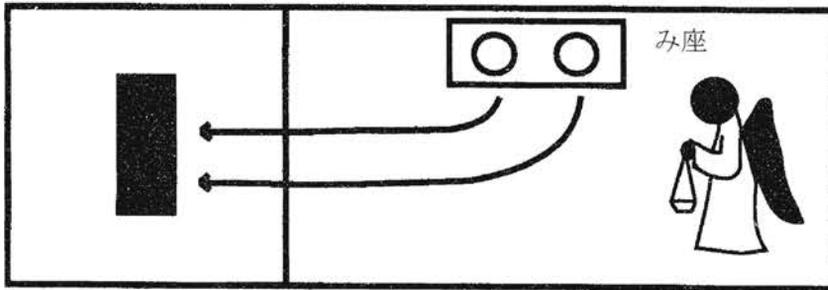
主の日に立ち得るためのなすべき必要な準備がある。主の日は裁きの日である。裁きの日に必要な準備は後の雨によって補われることはない。裁きのための準備はすべての悪しき言葉と行為に勝利することである。この準備をおろそかにすると、後の雨を受けることはできない。しかし、後の雨は「聖なる神のみ前に生きるにふさわしい者とする」。仲保者なしに神のみ前に生きるのである。人間のためになされることはすべて聖霊によってなされるのである。繰り返そう。仲保者なくして生きられるようにするのは最後のあがないである。最後のあがないにおいて、人から罪を除去するのは後の雨である。

個人のさばきには何が含まれるか、そのステップ

ステップ 1	ステップ 2		
調査審判	最後のあがない 後の雨は恵み(品性) の働きを完成する 仲保者なしに生きる ために備える	後の雨の力で 大いなる叫びの メッセージ	恩恵期間の終了 仲保者なし

ゼカリヤ 10:1 「あなたがたは春の雨の時に、雨を主に請い求めよ。主はいなずまを造り、大雨を人々に賜い、野の青草をおのおのに賜わる」。

ホセア 10:12 「あなたがたは自分のために正義をまき、いつくしみの実を刈り取り、あなたがたの新田を耕せ。今は主を求むべき時である。主は来て救いを雨のように、あなたがたに降りそそがれる」。



また第1章の二つのグループが聖霊を求めて祈っていたことを思い出していただきたい。至聖所のキリストに従って行ったグループは真の霊を受けたが、他のグループはサタンからの霊を受けた。今日、多くの者が最後のあがないと結婚式の真理を知らないで後の雨を祈り求めている。彼らの理解は聖所を出て至聖所に行くべきことを理解していない。これらの礼拝者は偽りの、サタンからの霊を受ける危険にある。聖所は罪に勝利する経験を表している。だから、仲保者なしに神のみ前に生きるために要求されているのは、罪に対する勝利がすべてだと当たり前前に思いこんでいる。彼らは最後のあがないの時代になされる、恵みの最後の働きの必要を感じないのである。

『後の雨の時に雨を主に求めよ』。変わらない普通のときのように、雨が降るなどと満足しきってはならない。それを請い求めよ。種の成長と完熟は農夫にかかっているのではない。神のみが収穫に熟させることがおできになるのであるが、しかし、人間の協力が必要である。神はわれわれのために働いてくださるが、われわれも頭を働かし、信仰を働かすことを命じておられる。もし、恵みの雨を望むなら全心全霊をもって神の好意を求めなければならない。われわれはあらゆる機会を活用して自らを祝福の通路となるように備えていなければならない。キリストは『わたしの名によって二、三人集まるなら、わたしもそのうちにいる』と言われた」（TM 508）。

「われわれは普段の成り行きや、摂理に頼ってはならない。我々は生命の水の泉が開かれるように祈らなければならない。われわれは生ける水を自ら受けなければならない。砕けた心をもって、今、後の雨の時に恵みの雨がわれわれに降るように最も熱心に祈ろう。出席するすべての集会で、この時にわれわれの魂に暖かさや水滴を与えてくださるように祈りを天に捧げるべきである。聖霊を神に求めるときに、それはわれわれのうちに働いて柔和、心の謙遜をもたらし、神への依存を自覚させ、完成する後の雨に備えさせる。信仰によって祝福を祈り求めるとき神が約束されたので、それを受けるであろう。」（TM 509）。

「われわれが今住んでいる時代は、求めるものにとっては聖霊の時代である。主の祝福を求めよ。われわれはもっと熱心に献身すべき時である。われわれには、暗黒にいる者たちにキリストを啓示するという困難な、しかし幸いな、輝かしい働きがゆだねられている。われわれはこの時代のための特別な真理を伝えるように召されている。このことのためにみ霊のそそぎは必須である。そのために祈るべきである。主は請い求めることを期待しておられる。この働きにわれわれは全心全霊を注いでいない」（TM 511, 512）。

神の民は後の雨が来るとき、義の王国を伝えるべき時に住んでいる。われわれは後の雨のために祈るべきである。それは、あなたは後の雨を受ける前にあなたの名前が裁きに呼ばれることを意味する。それ故に、後の雨を祈り求めることは厳粛なことである。しかし、至聖所においてキリストがなさっている働きを理解するとき、われわれははばかりことなく結婚式に入って行くであろう。われわれは力強い方法で伝えなければならない。求めることはわれわれのなすべきことである。

婚礼に来たれ！

アルファとオメガ

「聖書のすべての偉大なる真理の中心はキリストであり、正しく理解されるなら、すべては彼に導く。贖罪の偉大なる計画のアルファとオメガ、初めと終わりとしてキリストを提示しよう」(EV 485)。

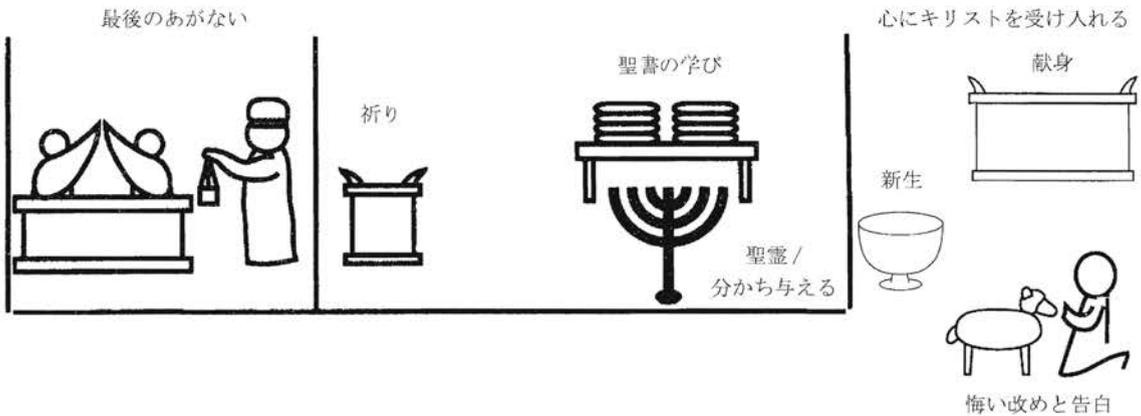
「贖罪の計画においてキリストはアルファとオメガであり、最初であり、終わりである」(人類のあけぼの 367 英文)。

聖所の日毎の奉仕で、クリスチャン経験をどのように始めるかを表している。信仰による義認のステップを教えている。どのように新しい心を持つか、罪に勝利するかを教えている。これをクリスチャン経験のアルファとすることができるだろう。

贖罪の計画

オメガ (終わり)

アルファ (初め)



年毎の奉仕ではあがないの終わりを教えた。そこで行われる仲保は最後のあがないと呼ばれた。魂の内に神の恵みの業を終える働きであり、人性と神性の結合を表す婚礼とも言われる。われわれは贖罪の計画のオメガと呼ぶことができよう。それ故に、聖所は贖罪の計画のアルファとオメガーはじめと終わりを例証する。

我が教会の初期にジョン・ハービー・ケログ博士は、生ける宮という本を書いた。預言の霊は致命的な異端であるアルファを含んだ本だと言明した。預言の霊は背教のアルファを描写しているが、それは今日の背教のオメガは何であるかという糸口を与えると信じる。その致命的な異端の描写のいくつかをみてみよう。

「生ける宮という本には、致命的な異端のアルファが提示されている。オメガがついて来るであろう。神が与えられた警告に注意を払わない者たちによってそれは受け入れられるであろう」（1 SM 200）。

「だまされてはならない。多くの者は誘惑的な霊に、また悪魔の教理に注意を払わないで信仰から離れるであろう。今われわれの前にこの危険なアルファがある。オメガは最も驚くべきものである」（1 SM 197）。



「生ける宮はこれらのアルファの説を含んでいる。わたしは、まもなくオメガが続くことを知っている。わたしはそのために震えおののく」（1 SM 293）。

「すでにわが民の間に心靈術的教えが入りつつある。それに注意を引かれる者は信仰をうち砕かれるであろう」（9 T 291）。

「今日、至るところの教育機関や教会に、神と神のみ言葉に対する信仰をくつがえす唯心論的な教えが侵入している。神とは自然界にみなぎっているエッセンスであるという説が聖書を信ずると称している多くの人に受け入れられているが、この説は外見がどんなに美しく見えても最も危険な欺瞞である。それは神について誤った観念を与え、神の偉大さや尊厳さをはずかしめるものである。そして、単に人を誤らせるだけでなく、必ず、墮落させる。その要素は暗黒であり、その領域は肉欲である。これを受け入れるとき、神から離れる。墮落した人間性にとってこれは破滅を意味する」（ミニストーリー 404）。

上の文によるとケログ博士の本の致命的な異端は異端のアルファであり、唯心論であった。これらの説は彼女を身震いさせた異端のオメガに発展するはずであった。

その異端のアルファとオメガは贖罪の計画のアルファとオメガを攻撃するであろうか？それが贖罪の計画のアルファを攻撃したかをみるために、異端のアルファがどんなものであるかをみてみよう。



心にキリストを受け入れるステップ

「罪によって生じた状態は不自然であり、これから回復する力は超自然的なものでなければならず、そうでないものは価値がない。人の心から悪の手を断ち切ることができる力は一つしかなく、それはイエス・キリストの中にある神の力だけである。十字架におつきになったキリストの血潮のうちには、罪から清めるものはなく、キリストの恵だけが私たちの墮落した人間性が持つ傾向に抵抗し、これを服従させうるのである。神に関する唯心論的な説はキリストの力を認めない。もしも神が全自然にみちている一つのエッセンスであるならば、キリストは万人に宿ることになり、人間が清くなるためにはただ自分の中にある力を発達させればよいことになる。

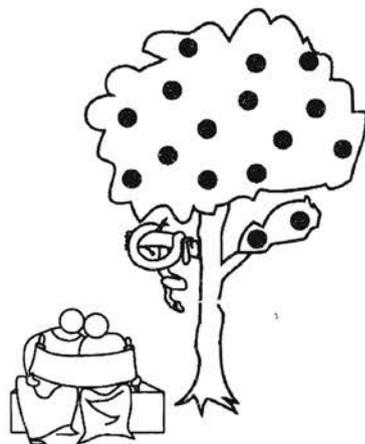
このような説を論理的につきつめていくと、それはキリスト教の制度をことごとく一掃してしまうことになる。贖罪の必要はなくなり、人間は自分の救い主となる。神に関するこうした理論は神のみ言葉を無効とし、この説を受け入れる人はついに聖書全体を作り話とみるに至る誘惑の大きな危険の中にいるのである。彼らは善を悪よりいいと思うかもしれないが、神を当然である最高の地位から閉め出し、神なしでは無価値である人間の力に依存する。人間の意志は助けがなければ悪に抵抗してこれに打ち勝つ真の力はない。魂の防御はくずれ、罪に対する防御はなくなる。一度、神のみ言葉と聖霊の拘束を拒むならば、私たちはどこまで墮落するか分からない」（ミニストリー・オブ・ヒーリング 404.405）。

上の引用文はこれらの説がなぜ危険であるかという理由、鍵を与えている。「もしも神が全自然にみちている一つのエッセンスであるならば、キリストは万人に宿ることになり、人間が清くなるためにはただ自分の中にある力を発達させればよいことになる」。聖所の研究で人は身代わりに罪を告白するために聖所に来なければならなかったことを学んだ。そして新しい心が与えられた。それはキリストが彼の心に入ってこられたことを意味した。もしキリストは全自然の中におられるなら、では彼はすでに人の中におられるのでキリストを受け入れるためにキリストのもとに来て罪を告白する必要はない。すでに人の中におられるのだから、すでにあるものを発達させればいいだけである。この異端が聖所の奉仕のアルファを攻撃していることに注目してほしい。その時があがないの初めであり、その時、はじめてキリストが心に入られるのである。

もしケログの本が異端のアルファであり、聖所に例証されているあがないのアルファ、あるいは初めを攻撃したなら、背教のオメガは聖所に例証されているあがないの終わりの部分に攻撃するということは当たり前の論理ではないだろうか？では、われわれは致命的な異端のオメガとは何であるかを発見しなければならない。どのようにしてそれを察知できるであろうか？もしケログの本が教会に教会に入ってくる異端のアルファであったなら、異端のオメガはすべての内にいます神について語るだろうか？

「すでにわが民の間に唯心論的教えが入りつつある。それに注意を引かれる者は信仰をうち砕かれるであろう」(8 T 291)。

「過去の経験が繰り返されるであろう。将来、サタンの迷信が新しいかたちをよそおうであろう。誤りがたのしそうな、うれしがらせるような方法で提示されるであろう。偽りの理論が光の装いをして神の民に提示されるであろう。このようにしてサタンは、でき得るならば選民をも惑わそうとするのである。最も誘惑的な影響を及ぼすであろう。心は催眠術にかけられたように魅了されるである」(8 T 293)。



上の引用文は、過去に教会に入り込んできた「生ける宮」も含めて、唯心論の教えに対して言われたところである。これによると、異端のオメガは同じ形で来るのではないという糸口を与えてくれる。それは汎神論ではないだろう。少なくとも同じ形の。神がすべてにいますという汎神論についてはアドベンチストはよく警告されてきた。神はすべてにいますというような説を教えている本はないだろうか？とアドベンチスト・ブック・センターで探す必要はないだろう。オメガは新しい形で来るのである。

「この時に、ある人たちによって主張されている詭弁の結果を見破ることのできる人はわずかである。しかし、主がカーテンを引き上げてわたしにその行き着くところの結末を示された。神の個性に関する唯心論的説は、つきつめていくと、キリスト教の制度をことごとく一掃してしまうことになる。それらはご自分の民のためにヨハネに与えようと天から来られたキリストの光をなきものに等しいと評価する。我々の前に展開しようとする諸事件は特別に注意を払うべき程の重要なものでないと教える。天に起源を発する真理を無効にし、神の民から過去の経験を奪い、その代わりに科学を民に与える。... 50年間も働きを支えてきた基本的な原則は誤りであったと見なされるであろう」(1 SM 203.204)。

上の文によると、主は致命的な異端のアルファを信じる結果を示されたという。結果は「全キリスト教の制度を一掃する」というのである。全キリスト教制度 (economy) というと始めから終わりまでの贖罪の計画である。始めから終わりまでのキリスト教制度、典礼を一掃するということは、贖罪の計画のアルファとオメガを取り除くことである。注目してほしいことは、50年間も堅く据えられた基本的原則をつき崩すというのである。

「この歴史の舞台で秘密の内にわれわれの信仰の土台を力強い方法でつき崩そうと働きかけているどんな影響力があるのだろうか？ その土台は祈り深いみ言葉の研究と啓示によってわれわれの働きの初めに据えられたものである。この基礎の上にわれわれは過去50年間建ててきたのである。このわれわれの信仰の柱のいくつかを取り除こうとする働きの始まりを見ていて、わたしが何か言うことがあると思っているだろうか？ わたしは「体当たりせよ！」との命令に従わなければならない。... わたしは神が与えたメッセージを伝えなければならない。結果は主にゆだねなければならない。わたしは今、与えられたすべてをそのまま提示しなければならない。神の民は略奪されてはならない」(1 SM 207.208)。

ここで強調されていることは、この異端のアルファと呼ばれている心霊術 (唯心論) の教えは、過去50年の間、堅く据えられてきたところのわれわれの信仰の土台を、突き崩そうとする試みの始まりであるということである。そこで、我々はこの唯心論によって攻撃された基本的な諸原則とは、何かをつきとめなければならない。

次の引用文を見ると、過去50年間にわたって攻撃されてきた基礎的な教理という、天におけるキリストの奉仕と第三天使の使命であると示されている。

「われわれは神の戒めを守る民である。過去50年間にわたってあらゆる種類の異端がわれわれに襲ってきて、み言葉の教えに関してわれわれの心をくさまそうとしてきた。特に天の聖所におけるキリストの奉仕、黙示録14章の天使によってもたらされた最後の時代の天からの使命に関してそうであった。一つ一つ祈り深いみ言葉の研究と主の奇跡的な力が証された真理に取って代わり様々な使命がセブンスデー・アドベンチストをせき立ててきた。しかし、今日のわれわれをあらしめたところの道標は、彼のみ言葉とそのみ霊の証が示しているように保たれなければならないし、保たれるであろう。主は疑う余地のない權威に基づいている基礎的諸原則を信仰によってしっかりと握り保持するように望んでおられる」
(1 SM 208)。



1844

「裁きの時は来た」を再臨と思った。大失望。

50年間、み言葉の研究によって基礎が据えられた

1. キリストの奉仕
2. 第三天使の使命

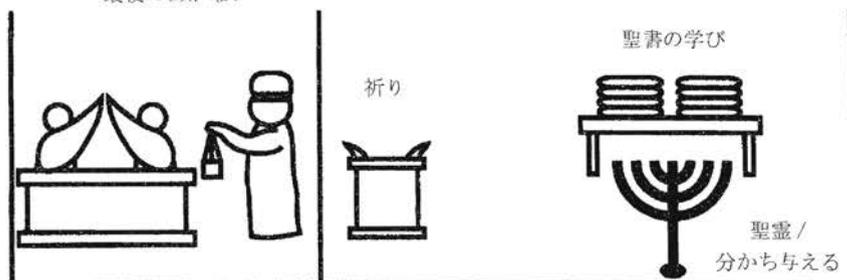
唯心論的説が特に真理を攻撃

これによると過去50年間、攻撃されたのは「特に天の聖所におけるキリストの奉仕、黙示録14章の天使によってもたらされた最後の時代の天からの使命」であったという。1844年にキリストが始められた奉仕という最後のあがないと呼ばれる至聖所における奉仕であった。もし、唯心論的説が過去50年間にわたって堅く据えられたキリストの奉仕についての真理を突き崩そうとしていたなら、それは至聖所における最後の仲保に関する真理への攻撃でなければならなかった。この最後の仲保は最後のあがないと呼ばれ贖罪の計画のオメガである。贖罪の計画のオメガへの攻撃は、どんな良い名前をつけようと、それは、オメガ異端であろう。なぜなら、それは贖罪の計画のオメガ(終わり)についての真理を攻撃するからである。

贖罪の計画

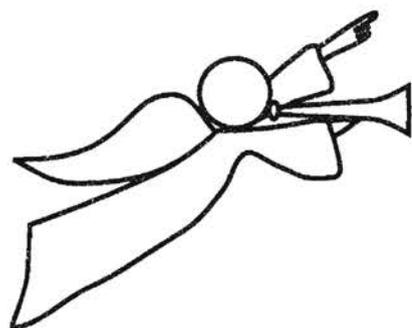
オメガ（終わり）

最後のあがない



アルファ（初め）

心にキリストを受け入れる



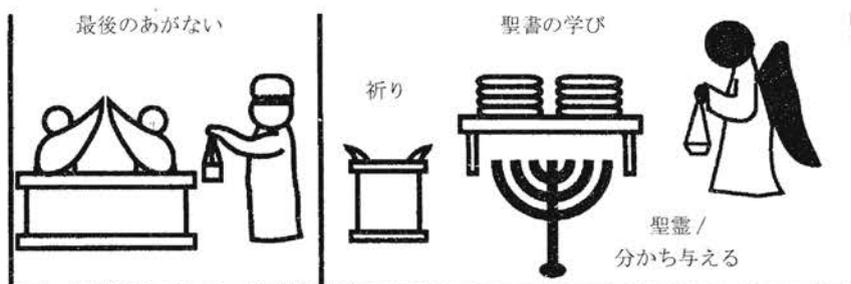
「第三の天使は、「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返したときに、天の聖所を指した。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。イエスはそこで箱の前に立って、恵みがなお与えられているすべての人々と、知らずして神の戒めを破った人々のために最後の仲保をしておられるのである。この贖罪は、生きている義人とともに、死んだ義人のためにも行われる…」(初代文集 414-415)。

唯心論が攻撃していた他の土台の諸原則は黙示録14章の三天使の使命である。第三天使は、それを受け入れるすべての者の心を、イエスが契約の箱の前で最後の執り成し、最後のあがないをしておられる至聖所に向ける。最後のあがないは贖罪の計画のオメガである。前に出た糸口から考えて異端のオメガは、贖罪の計画のオメガ、すなわち、最後のあがないを攻撃すると結論づけることができる。

贖罪の計画のイラスト

オメガ（終わり）

アルファ（初め）



この本の最初の章で、上のイラストにあるように、二つのグループについて学んだ。一つのグループは最後のあがないがとりおこなわれる至聖所に入っていった。他のグループは聖所に残っていてサタンを礼拝し始めた。このことは唯心論の説は最後のあがないの必要を認めないことを表している。さもなければ彼らは至聖所に入って行くであろう。人はどのように救われるかということに関して、今日の教会の主流をなしている説は、最後のあがないを無視するか、軽視するものである。今日の救いの計画に関する説が最後のあがないを無視、あるいは軽視するという事実は、最後のあがないの必要を認めない異端のオメガを受け入れる危険があると言うことを実証している。賢い乙女も、愚かな乙女もみんな居眠りしたのである。彼らが目さめたとき、愚かな乙女たちは最後のあがない、すなわち婚礼に入っていかなかったのである。

目覚めよう！

婚礼に来たれ！